

平成18年度 報告書

橘・東和地域連携型中高一貫教育

～豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり～



山口県立安下庄高等学校
周防大島町立安下庄中学校
周防大島町立日良居中学校
周防大島町立東和中学校

目 次

1	はじめに	3
2	地域・学校の概要	4
	(1) 地域の概要	4
	(2) 学校の概要	4
	(3) 実践研究組織	5
	(4) 実践研究の経過	5
3	実践内容とその成果および課題	8
	(1) 本地域の目指す中高一貫教育	8
	ア これまでの取組みの概要	8
	(ア) 一人ひとりの学力の充実をめざす教育	8
	(イ) 6年間を見通したテーマ学習（「郷土おおしま」の取組み）	9
	(ウ) 体験的な学習を重視した学校行事	9
	(エ) 6年間を見通した進路指導	9
	(オ) 6年間を見通した生徒指導	9
	(2) 実践研究の課題	10
	(3) 「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」の取組み	10
	ア 中高で連携した特色ある教育課程の編成	10
	イ 中高教員による指導方法の工夫・改善	14
	ウ 基礎学力の定着度の確認方法および指導へのフィードバック	17
	エ 「周防大島高校が求める5教科の力」の改善	20
	オ 6年間を見通した計画的な資格取得	22
	カ 中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の取組み	23
	(4) 「6年間を見通したテーマ学習」の取組み	24
	ア ねらい	24
	イ 中学校における取組み	24
	ウ 高等学校における取組み	25
	エ 評価について	26
	オ 成果と課題	26
	カ 今後の展望	26
	(5) 「体験的な学習を重視した学校行事」の取組み	27
	ア ボランティア活動	27
	イ イングリッシュキャンプ	28
	ウ ふれあいマラソン大会	29
	エ ふれあいみかん収穫作業	30
	オ 私の主張・郷土おおしま発表大会	31
	(6) 「6年間を見通した進路指導」の取組み	33
	ア 進路指導目標	33
	イ 中高6年間の指導計画	33
	ウ 取組み	34
	エ 成果と課題	35
	オ 今後の展望	35
	(7) 「6年間を見通した生徒指導」の取組み	35
	ア 生徒指導目標	35

イ	中高6年間の指導計画	35
ウ	生徒指導年間計画	37
エ	取組み	38
オ	成果と課題	41
カ	今後の展望	41
(8)	各教科での取組み	42
ア	国語科	42
イ	社会科	42
ウ	数学科	43
エ	理科	44
オ	英語科	47
カ	音楽科	49
キ	保健体育科	49
4	おわりに	51
参考資料		53
	橘・東和地域中高一貫教育 教育課程（平成14年度～平成17年度）	53

1 はじめに

本地域で平成13年度より“豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり”を基本コンセプトに掲げて連携型中高一貫教育が開始され、6年が経過した。開始時に中学に入学してきた生徒が、中高一貫教育の全課程を終了し、高校を卒業した。開始以来、様々な取組みを実施し、成果や課題を検討して、内容の充実・発展に取り組んできた。これまでの6年間の取組みを再検証し、更なる実践に取り組む時期を迎えている。

本年度は、安下庄高校が中高一貫教育を実施して以来取り組んできた、一人ひとりの学力の充実を目指したシステムの検証を引き続き中高教員で行うとともに、定期テストの共通化によるデータ分析において、度数分布表を作成するという新たな取組みもスタートさせた。また、平成16年度に作成した「安下庄高校が求める5教科の力」を、平成19年度からスタートする山口県立周防大島高等学校にあわせて「周防大島高校が求める5教科の力」に改め、改訂作業をさらに継続して行った。中学校教員が主体となって、従来の記述中心のものから演習問題を多く取り入れたものへと改訂することで、中学生にとってより使いやすくなった。

中高一貫教育の様々な取組みの多くは、劇的に変化したり、成果が顕著に現れたりするものではなく、日々の地道な活動が基盤となっている。連携型中高一貫教育を開始して6年が経過した現在、開始当時には見られなかった新たな課題や問題も見えてきたが、中高教員相互の協議を重ね、全教員の共通理解を図りながら、課題の一つ一つを着実に克服して前進している。

2 地域・学校の概要

(1) 地域の概要

本地域は瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島）の東部に位置し、豊かな自然に恵まれた環境の中でみかんを中心とした農業と漁業の盛んな島である。本州と島を結ぶ大島大橋が開通してから、島で暮らす人々の生活の変容ぶりには目を見張るものがあるが、澄んだ空気と、のどかな雰囲気は今も昔も変わらないままである。

本地域は日本中を旅した民俗学者・宮本常一の出身地であり、故人の遺志を継ぐ動きとして、学びの場である『郷土大学』の講義が定期的に行われている。また、平成16年にオープンした周防大島文化交流センターには、宮本常一が残した膨大な数の写真のデジタルデータが保存されており、宮本常一の足跡を全国に発信している。この宮本常一の研究手法を学ぶことによって、子供たちがより深くふるさと大島について学び、大島を愛する心を育てることを試みている。

また、地域住民の学校教育に対する関心の高さは、安下庄高等学校の前身である旧制安下庄中学校が全国でも珍しい町立中学校として創立した歴史があることからもうかがえる。町当局の学校教育への理解も深く、地域の教育力で学校が支えられている。

なお、大島郡では、昭和38年にハワイ州カウアイ島と姉妹島縁組みを結んでおり、平成10年度から平成17年度までの間に、安下庄高校の2年生がハワイ修学旅行を7回実施するなど、ハワイ州との交流が盛んである。

平成16年10月1日に大島郡の4町が合併して、周防大島町として新たに動き始めた。近年の少子化と若者の流出により高齢化の一途を辿ってはいるが、高齢者の福祉制度の充実やブロードバンド化の推進、周防大島町の良さを再発見する様々なイベントが企画されるなど、高齢者にとって住みよい、活力に溢れる町である。

(2) 学校の概要

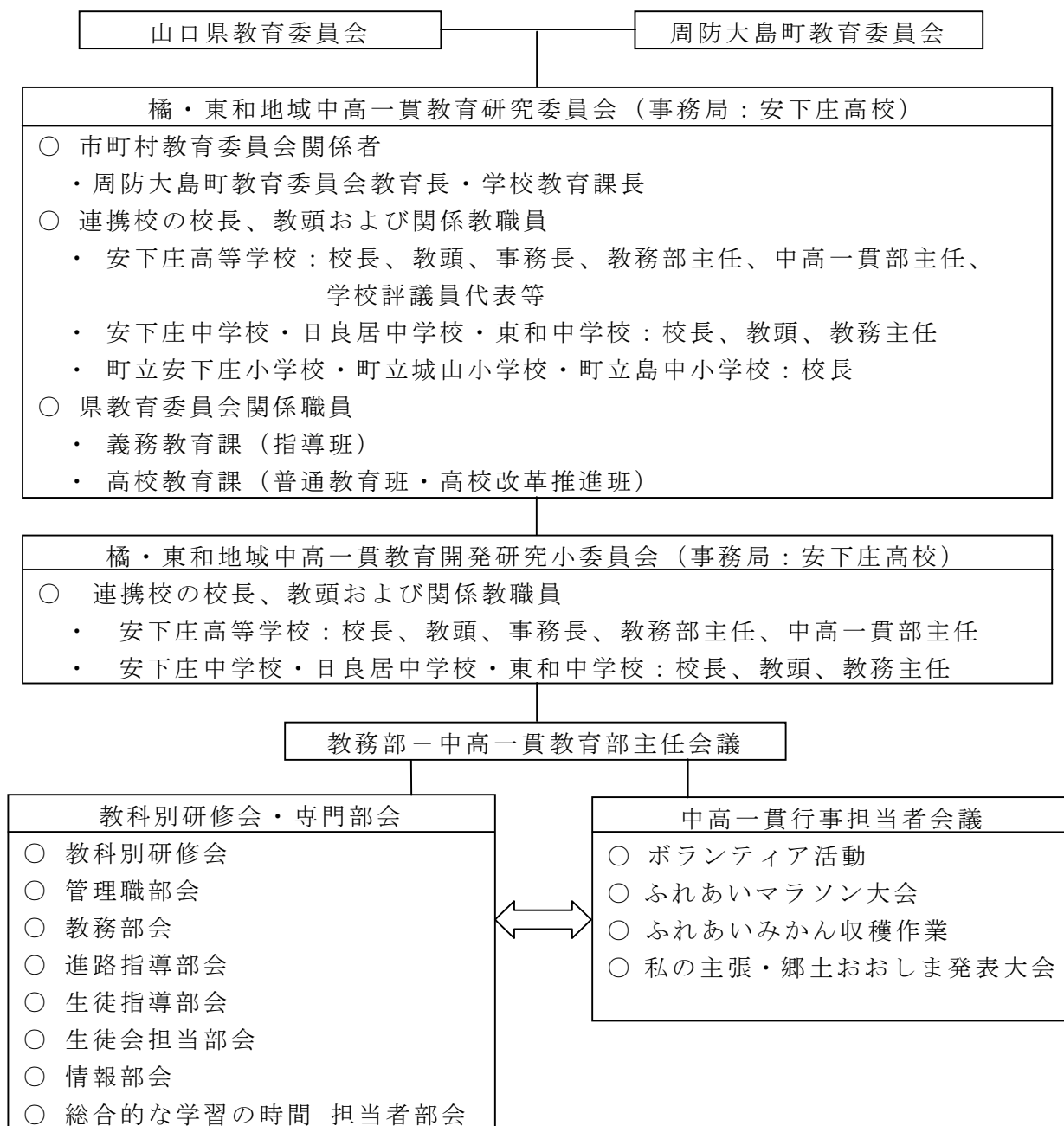
本地域では、島の中央に位置する山口県立安下庄高等学校と近隣の周防大島町立安下庄中学校・日良居中学校・東和中学校の3中学校が平成13年度から県内初の連携型中高一貫教育校としてスタートした。

安下庄高校は全校生徒169名の小規模校であるが、そのメリットを最大限生かすために、1学年の国語・数学・英語と、2学年の一部の授業で習熟度別少人数指導を行い、きめ細かな指導を実施している。

連携中学校の中で、最も安下庄高校に近い安下庄中学校は各学年1クラスで、生徒数80名で連携中学校の中で一番生徒数の多い学校である。次に近い日良居中学校は全校生徒数30名という小規模校である。高校から最も離れた距離にある東和中学校は生徒数65名である。

連携3中学校ともに連携型中高一貫教育に加えて、平成17年度から地域の小学校との小中連携にも取り組んでいる。これにより、橘・東和地域全体が地域の子供たちは地域で育てるという体制が整い、小学校から高校までの12年間という大きなスパンで教育活動に取り組むことができるようになった。

(3) 実践研究組織



(4) 実践研究の経過

平成18年度

- 4月5日 ○第1回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会 (安下庄高校; 4校の全教職員が参加)
- ◇第1回管理職連絡調整会議
 - ◆第1回教務部-中高一貫教育部主任会議
- 4月27日 ・連携中学校の保護者への安下庄高等学校や中高一貫教育の概要説明 (日良居中学校)
- 5月1日 ◆第2回教務部-中高一貫教育部主任会議 (安下庄中学校)
- 5月2日 ・連携中学校教員によるカウンセリング活動 (日良居中学校教諭が来校)
- 5月8日 ・連携中学校教員によるカウンセリング活動 (安下庄中学校教諭が来校)
- 5月9日 ☆中高教員の相互交流授業 (1学期) 開始

- 5月10日 ・ 連携中学校教員によるカウンセリング活動（東和中学校教諭が来校）
- 5月26日 ・ 総合的な学習の時間（安下庄高校）1学年バスハイク（陸奥記念館・周防大島文化交流センター、日本ハワイ移民資料館・久賀民俗資料館）
- 6月5日 ◆第3回教務部一中高一貫教育部主任会議（日良居中学校）
- 6月7日 ・ 総合的な学習の時間（安下庄高校）特別講義：「地域調査の進め方」「周防大島の女性の暮らしを掘り起こす」「大島の昔の歌について」「周防大島の万葉の植物」
- 6月19日 ○第2回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（橘総合センター）
- 7月3日 ◆第4回教務部一中高一貫教育部主任会議（東和中学校）
- 7月4日 ・ 第1回「ふれあいみかん収穫作業」担当者会議（安下庄高校）
- 7月10日 ・ 高教研理化部会において中学教員とのT・Tを研究授業として実施（安下庄高校）
- 7月11日 ・ 東和中学校教諭による道徳の研究授業を安下庄高校1年生対象に実施（安下庄高校）
- 7月13日 ・ 安下庄高校の食育に関する講演会に、連携中学校の養護教諭が参加
- 7月15日 ・ 周防大島高校オープンキャンパス（安下庄高校）
- 7月21日 ・ 安下庄中学校の生徒が総合学習の一環として安下庄高校の歴史等について取材
- 8月7日 ○第3回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（橘総合センター、安下庄中学校）
◇第2回管理職連絡調整会議
- 8月17日～19日（夏期休業中随時） ・ イングリッシュキャンプ（英語サマーセミナー）…橘ウインドパーク
・ 各種ボランティア活動実施（花火大会、24時間テレビなど）
- 9月3日 ・ 安下庄高等学校第59回体育祭に連携中学校ほかから招待リレーに参加
- 9月10日 ・ 日良居中学校秋季大運動会におけるボランティア活動（安高生1年5名が参加）
- 9月13日 ☆中高教員の相互交流授業（2学期）開始
- 9月27日 ・ 安下庄高校・安下庄中学校生徒による交通安全キャンペーン
- 10月3日 ◆第5回教務部一中高一貫教育部主任会議（安下庄高校）
- 10月20日 ・ 安下庄中学校公開授業「人間関係づくり」に安下庄高校教諭が参加
- 10月25日 ・ 連携中学校養護教員によるカウンセリング活動（東和中学校養護教諭が来校）
- 10月28日 ・ 安下庄高校の日良居中学校出身生徒が日良居中学校文化祭に作品を出品
- 10月31日 ・ 連携中学校養護教員によるカウンセリング活動（日良居中学校養護教諭が来校）
- 11月1日 ○周防大島高等学校設置式（安下庄高校）
・ 連携中学校養護教員によるカウンセリング活動（安下庄中学校養護教諭が来校）
- 11月6日 ○第4回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（東和中学校）
◇第3回管理職連絡調整会議
◆第6回教務部一中高一貫教育部主任会議
- 11月8日～9日 ・ 安下庄高校教諭2名が中高一貫教育校（京都市立西京高等学校、京都府立園部高等学校）を学校訪問
- 11月13日 ・ 第2回「ふれあいみかん収穫作業」担当者会議（安下庄高校）
- 11月17日 ・ 安下庄高校の人権教育講演会を連携3中学校に案内
- 11月19日 ○周防大島高等学校学校説明会（中学生・保護者対象、橘総合センター）
- 11月19日 ○周防大島高等学校学校説明会（中学校の進路担当者対象、安下庄高校）
- 11月22日 ・ ふれあいマラソン大会（終了後ふれあいみかん収穫作業参加生徒の打ち合わせを実施）
- 11月27日 ・ 東和中学校進路相談会に安下庄高校教諭（3名）が参加
- 12月1日 ・ 御調地域連携型中高一貫教育公開研究会に連携校から6名が参加
・ 第1回「私の主張・郷土おしま」発表大会担当者会議（安下庄高校）
- 12月12日 ・ ふれあいみかん収穫作業
- 1月10日 ◆第7回教務部一中高一貫教育部主任会議（安下庄中学校）

- 1月15日 ・高校3年生進路内定者によるキャリアセミナー（安下庄中学校）
- 1月16日 ・高校3年生進路内定者によるキャリアセミナー（東和中学校）
- 1月18日 ◎平成18年度橘・東和地域中高一貫教育研究委員会（安下庄高校）
- 1月22日 ・高校3年生進路内定者によるキャリアセミナー（日良居中学校）
- 1月25日 ・「私の主張・郷土おおしま」発表大会
- 2月4日 ・サザンセトロードレースにおけるボランティア活動（東和中全校生徒）
- 2月7日・8日 ・連携型中高一貫教育に係る入学者選抜
- 2月22日 ◆第8回教務部－中高一貫教育部主任会議（日良居中学校）
- 3月5日 ○第5回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（安下庄高校；4校の全教職員が参加）
 ◇第4回管理職連絡調整会議（久賀高校および久賀中学校の管理職・教員も参加）
 ◆第9回教務部－中高一貫教育部主任会議
- 3月16日 ・連携中学校の安下庄高校入学予定者を対象とした、ゆとりを生かした春休み学習会①
- 3月23日 ・連携中学校の安下庄高校入学予定者を対象とした、ゆとりを生かした春休み学習会②

3 実践内容とその成果および課題

(1) 本地域の目指す中高一貫教育

○ コンセプト

豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり

○ コンセプトを実現するための3つの柱となる教育活動

1 一人ひとりの学力の充実をめざす教育

2 6年間を見通したテーマ学習

3 体験的な学習を重視した学校行事

本地域の中高一貫教育における基本コンセプトを実現するための三本柱として設定された「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」、「6年間を見通したテーマ学習」、「体験的な学習を重視した学校行事」を研究テーマの中心に据えた。さらに、「6年間を見通した進路指導」や「6年間を見通した生徒指導」にも取り組み、様々な成果をあげてきた。

ア これまでの取組みの概要

(ア) 一人ひとりの学力の充実をめざす教育

- 生徒一人ひとりの学力の充実をめざす教育システムの構築（図1参照）
- 中高6年間を見通した特色ある教育課程の編成
 - ・ 中学校における各教科年間指導計画の共通化
 - ・ 中学校における多様な選択教科の開設
- （「BS (Basic Study)教科、SS (Skill Study)教科、ES (Expression Study)教科」）
 - ・ 高等学校第1学年の国語・数学・英語における習熟度別少人数指導の実施
 - ・ 高等学校第2学年から、生徒の個性や進路に応じた多様なコース・系列の設定
- 中高教員による指導方法の工夫改善
- 基礎学力の定着度の確認方法及び指導方法へのフィードバック
- 「周防大島高校が求める5教科の力」の作成および活用方法の工夫・改善
- 6年間を見通した計画的な資格取得
- 連携中学生の中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の実施（数学科・英語科）

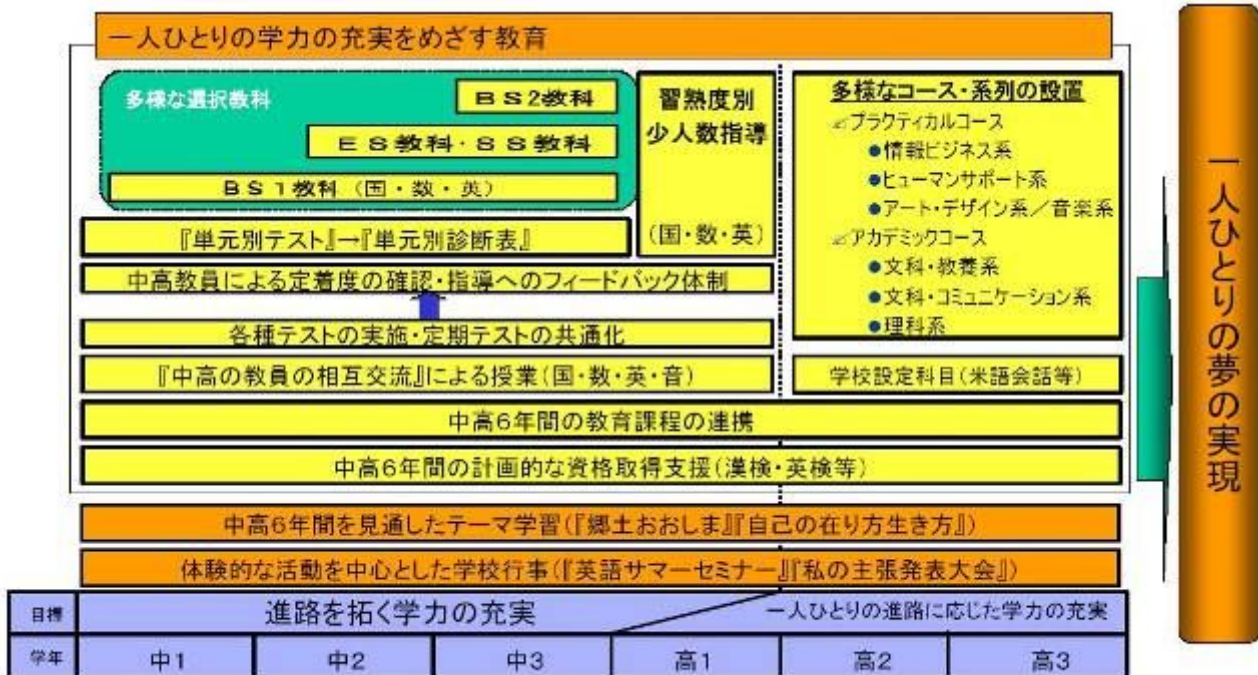


図1 基本コンセプトを具現化するための教育システム

(イ) 6年間を見通したテーマ学習（「郷土おおしま」の取組み）

- 学年に応じたテーマ学習の指導法及び評価法の研究
- フィールドワークを取り入れた調査方法の研究

(ウ) 体験的な学習を重視した学校行事

- 地域との連携を図りつつ、生徒の主体的な取組みを充実させる工夫
- 異年齢集団の中での円満な人間関係の育成
- 中高担当教員による役割分担の明確化と協力体制の強化

(エ) 6年間を見通した進路指導

- 中高6年間を見通した年間指導計画の作成
- 生徒一人ひとりが自己の在り方生き方を考え、主体的に進路決定を行うための段階的・継続的な支援
- 中学生を対象とした体験入学・キャリアセミナーの実施・充実

(オ) 6年間を見通した生徒指導

- 高校生を対象とした、中学校教員・養護教諭によるカウンセリング活動の実施
- 中高6年間の各クラスの学級経営方針・基準の統一への取組み
- 自己実現のために必要な課題発見・解決力や、コミュニケーション力・表現力の向上
- 各種合同行事における、異年齢集団の中での人間関係づくりへの支援

(2) 実践研究の課題

- 生徒一人ひとりの学力を向上させる学力充実システムの再検証
- 中学校修了時の学力を確認するための「周防大島高校が求める5教科の力」の改善
- 体験的な学習を重視した学校行事の実施における中高の協力体制の強化

本年度も昨年度に引き続き、生徒一人ひとりの学力の充実をめざす教育システムの改良点や再検討事項を絞り込んだ。特に、昨年度の協議により作成することになった、3中学校合同の度数分布表の検証を行うとともに、中学生および中学校教員への効果的なフィードバックの方法を検討した。

また、中学校修了段階での中学生の学力を確認できるようにするために、平成16年度より本地域独自で作成した「安下庄高校が求める5教科の力」(通称;ガイドライン、本年度より「周防大島高校が求める5教科の力」に改称)の一層の改訂作業を進めた。作成以来、中高教員による改訂作業を継続的に行ってきたが、今年度はどの教科とも中学校教員の主導により改訂作業を進め、今まで以上に中学生に活用しやすいガイドラインへと改訂することができた。

さらに、中高一貫教育にかかる各種合同行事において、担当者会議での協議の段階から中学校と高校とで役割分担を明確化し、中高の担当教員が協力して学校行事を運営できるように工夫した。特に、私の主張・郷土おおしま発表大会では、中学校と高校の生徒会執行部が司会進行を共同で行うなど、一層の協力体制を構築することができた。

(3) 「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」の取組み

ア 中高で連携した特色ある教育課程の編成

○ 中学校における各教科年間指導計画の共通化

(ア) 取組み

- 連携3中学校の各教科の年間学習指導計画の共通化
- 定期テストの共通化に対する中高教員の共通理解の徹底
- 中高間および中中間での教科担当者による連絡体制の強化

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 定期テストの共通化の導入とそのねらいについて、中高教員での共通理解を図ることができた。○ 高等学校を含めた連携校間での教科研修の機会が増え、指導方法の工夫など、研修意識が高まり、共通の課題や指導上の問題点を多角的に分析することができた。○ 基礎学力の定着度の確認および生徒の学習のつまずき箇所の発見が容易になった。	<ul style="list-style-type: none">○ 年間指導計画を学校・教科間で再確認し、計画的な指導の徹底を図る必要がある。○ 教科担当者間での連絡をより密にし、年間を通じて、より系統的・効果的な指導が実施できるよう努力する必要がある。

(ウ) 今後の展望

指導計画の共通化が始まって6年目になり、定期テストや指導計画の共通化が定着してきた。しかし、中高の教員一人ひとりがもう一度出発地点に立ち戻り、日々の授業実践における指導の質的向上をねらった当初のねらいを考え直すとともに、教科ごとに十分な協議を行い、年間指導計画や定期テストの共通化に関する研究や実践をより発展させる必要がある。

また、本年度は年間指導計画の様式も3校で共通化し、中学校間の連携を一層強くすることができた。今後、更なる分析を進めるためにも共通化する部分を絞り込み、分析した結果を日頃の授業活動にフィードバックすることも踏まえて授業に取り組んで行くことが必要になると思われる。

○ 中学校における多様な選択教科

(ア) 取り組み

- B S (Basic Study) 教科における、必修科目の補足的な学習の実施
- S S (Skill Study) 教科における、生徒の個性や特性の伸長
- E S (Expression Study) における生徒の自己表現能力の育成

B S教科は、B S 1とB S 2に分けて実施し、必修教科の補足的学習に重点を置き、基礎学力の定着をめざしている。B S 1教科については、国語・数学・英語の3教科を開設した。また、B S 2教科については、社会・理科の2教科を開設した。

S S教科では、音楽・美術・保健体育・技術家庭科等の教科を開設し、生徒の個性や特性を伸ばすことをめざした。

E S教科においては、「表現活動」に重点をおき、生徒の自己表現能力を高めることをめざしている。

E S教科では、高等学校の教育課程を見通し「情報」・「英会話」・「表現」の教科を開設した。「情報」では、I T関係の学習を中心に実施し、情報収集やプレゼンテーション能力を養うとともに、学校生活をはじめ生活全般の中で、コンピュータを積極的に活用する態度を養う。「英会話」では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うとともに、英語で自己表現する能力を高める。「表現」では、国語だけでなく音楽・美術・保健体育等の教科まで幅を広げ、様々な自己表

現能力を養う。(表1参照)

教 科		内 容
B S 1	国 語	・基礎・基本の定着を図るための漢字学習・作文学習や劇、言葉遊び等の取組み ・教員作成の教材の活用
	数 学	・必修数学の復習や、基本問題を中心とした学習
	英 語	・単元テストや定期テスト等でつまずいた内容の繰り返し学習
B S 2	社 会	・必修社会の復習や教員作成の教材の活用
	理 科	・興味・関心を持たせる実験や問題集を利用した基礎・基本を定着させる学習
S S	音 楽	・ギターや管楽器・ピアノなどの演奏技能の修得とアンサンブル
	美 術	・各自が選んだ制作方法での作品づくり
	保 体	・バドミントンやレクリエーションスポーツなどを通して運動の基礎を修得
	技 術	・決められた材料を利用した作品づくりや、コンピュータの基礎的な学習
E S	情 報	・インターネットを利用して情報を収集し、その資料をもとにプレゼンテーションを行うなど、コンピュータを活用した学習
	英会話	・ビデオ視聴・クイズやゲームによる基本的な日常会話の学習や、英語で自分を紹介するポスターづくり ・ALTや高校教員とのT・Tで実施
	音 楽	・民俗芸能ケチャの表現や手拍子でのリズム創作やアンサンブル、和楽器演奏や歌唱の取組み
	美 術	・各自の課題に基づく創作活動
	保 体	・ダンスやボディーパーカッションによる身体表現活動

表1 中学校における多様な選択教科

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒一人ひとりの能力を生かせる場面が多くなり、生徒の学習意欲が向上した。 ○ 選択教科の授業で高校教員とのT・Tを実施することで、中学生の興味・関心を高めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指導内容や指導方法については、通常の授業との関連や位置づけも再検討する必要があると思われる。

(ウ) 今後の展望

それぞれの選択教科で身に付けさせる基礎学力やねらいを明確にし、生徒・教員ともに十分に理解して授業に取り組むことが重要である。そして、単なる通常授業

の補完的な役割としての選択教科ではなく、BS・ES・SSのそれぞれの選択教科について担当教員で十分な協議を重ね、高校での関連する授業内容も考慮し、中高での継続した指導が行えるよう、検証していく必要がある。

○ 高等学校における習熟度別少人数指導

(ア) 取組み

- 高等学校1年生を対象に、国語総合（古典分野）、数学Ⅰ・数学A、英語Ⅰで実施
- 1学年2クラスを合併させ、生徒の理解度・到達度に合わせて、発展クラス（1クラス）と基礎クラス（2クラス）に分けて授業を展開
- 数学・英語において、週一回程度、連携中学校の教員が高等学校を訪れ（数学3名、英語3名）、T・Tにより、きめ細かな指導を展開

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の到達度に合った内容を学習させることができ、個人指導の時間もとれるので、大変有効である。 ○ 生徒がつまずきやすい箇所を事前に予測し、重点的に補足説明等を行うことができ、一人ひとりの理解度に応じたきめ細かな指導ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎・発展の2段階による習熟度別学級編成では、生徒の理解度の差が大きく、生徒の学力差や個性に対応した指導を行うためにも可能な限り弾力的な学級編成が必要である。 ○ 少人数であるメリットを生かした指導方法と評価の方法について、さらに協議を進めていく必要がある。

(ウ) 今後の展望

生徒一人ひとりの学力を向上させる手段として習熟の程度に応じて授業する方法は有効であると思われる。しかし、基礎・発展の2段階による習熟度別学級編成では、まだまだ生徒の理解度の差が大きいに思われる。

来年度より、安下庄高校と久賀高校が統合され、周防大島高校が開校することとなった。周防大島高校では、習熟度を従来の2段階から更に細分化し、よりきめ細かな習熟度別少人数指導を実施していくことにしている。細分化されたクラスで多様な生徒の学習をどこまでサポートできるか、全力で取り組んでいく必要がある。

○ 高等学校における多彩なコース・系列の設置

(ア) 取組み

- 生徒の進路や興味・関心及び保護者のニーズの多様化に対応するために、平成14年度入学生の2年次の教育課程から2コース・6系列を設置（図2参照）
 - ・「アカデミックコース」では、上級学校への進学をめざし、学究的な学習を展開
 - ・「プラクティカルコース」では、コンピュータや福祉などの、実践的な学習を展開

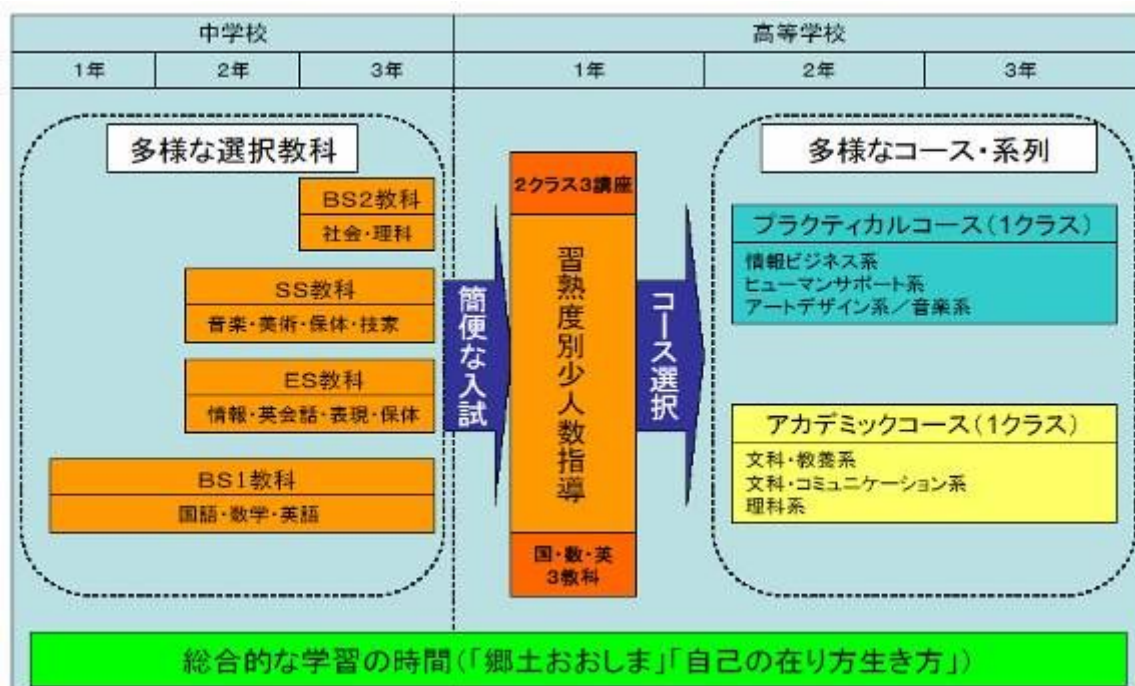


図2 中高6年間を見通した特色ある教育課程

(イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の多様な進路希望に対応でき、6年間継続した学習を行うことができる。 ○ 具体的に進路をしばり、夢の実現にむけて目標を設定できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2コース6系列の多様な教科・科目を効率よく運用するための工夫・検討が必要である。

(ウ) 今後の展望

高等学校における2コース6系列の設置により、中学生の多様な興味・関心に対応できるというメリットがある。しかし、同時に、実際の運用面で慎重に検討する必要がある。今年度は全学年の生徒が新教育課程による授業を受講しており、授業運用面での課題を精査し、生徒の進路状況や社会情勢を十分に把握して、必要があればコース内容や選択授業の再検討を行うなど、効率的な運用をめざすことが求められている。また、多彩な選択授業を開講する上で、各授業を担当する教員の数が最大の検討課題となってくる。生徒一人ひとりの興味・関心に即した授業の開講が実現できるよう、教員定数を維持するなど、様々な教育環境を整える必要があると思われる。

イ 中高教員による指導方法の工夫・改善

(ア) 取組み

- 交流授業における中高教員のT・Tを中心とした、きめ細かな指導の展開
- 中学校の通常授業における交流授業での指導方法の工夫・改善

(イ) アンケート実施とその結果

昨年度同様、今年度末に連携中学生と高校1年生を対象に交流授業に関するアンケートを実施した。

a 中学校における交流授業について

Q 1) 国語・数学・英語・音楽の交流授業について、どう思いますか。

		大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		合計	受けていない		合計
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		人数	%	
国語	H18	6	17.1	24	68.6	4	11.4	1	2.9	35	78	69	113
	H17	4	22.2	11	61.1	3	16.7	0	0	18	51	73.9	69
数学	H18	16	26.7	36	60	7	11.7	1	1.7	60	66	52.4	126
	H17	19	33.3	24	42.1	13	22.8	1	1.8	57	14	19.7	71
英語	H18	26	27.7	54	57.4	13	13.8	1	1.1	94	36	27.7	130
	H17	20	32.8	36	59	3	4.9	2	3.3	61	0	0	61
音楽	H18	24	28.2	50	58.8	8	9.4	3	3.5	85	46	35.1	131
	H17	19	27.5	35	50.7	8	11.6	7	10.1	69	0	0	69

Q 2) 交流授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校でやっていることがわかる。 ○ 色々な国語ゲームをしたので面白かった。 ○ 文法など難しい単元を丁寧に教えてくれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 慣れていないので頭にすんなり入りにくい。 ○ BSだけでなく、普通の授業にも来て欲しい。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ わからないところがあったらすぐに教えてもらえる。 ○ 中学校とは違った方法での解き方がわかる。 ○ 自分の力を試せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教え方が難しいことがある。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 普段の授業で習わないことを教えてくれる。 ○ ALTとの交流ができるのでよい。 ○ 発音がいい。 ○ 英語を使う回数が増える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業数が少ないこと。 ○ 応用過ぎてわからない。 ○ 普段の授業とあまりかわりがなかった。

b 高校における交流授業について

Q 1) 国語・数学・英語・音楽の交流授業について、どう思いますか。

			大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		合計	受けていない	
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		人数	%
連携中 出身者	数学	H18	6	23.1	17	65.4	3	11.5	0	0	26	0	0
		H18	1	7.7	12	92.3	0	0	0	0	13	10	43.5
連携中 出身者以	数学	H18	3	17.6	2	11.8	5	29.4	7	41.2	17	0	0
		H18	3	18.8	7	43.8	2	12.5	4	25	16	2	11.1
全 体	数学	H18	9	20.9	19	44.2	8	18.6	7	16.3	43	0	0
		H17	3	5.2	28	48.3	20	34.5	7	12.1	58	0	0
	英語	H18	4	13.8	19	65.5	2	6.9	4	13.8	29	12	29.3
		H17	0	0	9	37.5	12	50	3	12.5	24	35	59.3

Q 2) 交流授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校で教わった先生なので聞きやすい。 ○ 先生が2人いるので聞く機会が増える。 ○ 高校の先生に聞けないときに中学校の先生に聞ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先生1人の方が意見が異なることがないため理解しやすい。 ○ 中学校の先生ばかりに頼ってしまう。 ○ 先生にもっと積極的に参加して欲しい。 ○ 連携中出身ではないから役に立たない。 ○ 2人が前に出て教えて欲しい。 ○ 知ってる先生(高校教員)よりも教えてもらいづらい。 ○ もっとたくさんの時間に来て欲しい。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先生が2人いるので聞く機会が増える。 ○ 知っている先生だと愛着があって聞きやすい。 ○ (中学校の先生は)難しいことを言わないので役に立つ。 ○ 色々な教え方で学べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発展クラスにも先生に来て欲しい。 ○ 進むペースが遅くなる。 ○ 中学校の先生がT1をやってもよいのではないか。 ○ もっと中学校の先生に来て欲しい。 ○ あまり見られると恥ずかしい

今回のアンケート結果で注目すべきは、bのQ1)である。これは高校での交流授業に対する高校生の評価であるが、同じ数学の交流授業を受けていても、連携中学校出身の生徒が『大変役に立つ』、『役に立つ』と答えた割合が88.5%もあるのに対し、連携中学校以外の中学校出身者は、同じ答えの割合が29.4%と、1/3にも満たない結果となった。この結果は英語においても同様で、連携中学校出身の生徒の割合が100%であるのに対し、それ以外の中学校出身者の割合は62.6%となった。このことから、中高一貫教育における交流授業の実施により、連携中学生は中学校時より高校教員と接しており、授業や学校行事等を通して人間関係づくりがある程度できているため、高校入学後も交流授業に対して前向きに取り組もうとする姿勢が出てきているものと思われる。このことは、教員が2人いることで分からない箇所を質問しやすい雰囲気ができたり、また2人で授業を進めることで緊張感のある授業を実施できたりと、交流授業のメリットを最大限生かした環境ができていることを示していると思われる。それに対し、連携中学校出身者以外の生徒は、2人の教員が授業を進める学習環境に馴染んでおらず、その結果、授業に集中して取り組めていない様子が、アンケート結果からうかがえる。前向きに授業に取り組む姿勢は、授業内容の理解度の向上へつながる重要な要因であり、この点から考えても、中学校時に中高教員によるT・T指導を受けてきた連携中学校の生徒は、学力の向上につながる要因をより強く持っていると言える。交流授業のメリットを生かし、生徒の学力向上を目指すためにも、連携中学校から一人でも多くの生徒が周防大島高校へ入学することが望まれる。

ウ 基礎学力の定着度の確認方法および指導へのフィードバック

(ア) 取組み

- T・Tによるつまずき箇所の発見
- 「教科別診断表」や「単元別テスト」を活用した定着度の確認と指導へのフィードバック
- 定期テストの共通化によるデータを活用した資料（度数分布表）の作成とフィードバック方法の検討

高等学校では、平成14年度の入学者選抜から、いわゆる『簡便な入試』を実施しているが、この地域に連携型中高一貫教育を導入しても、中・高等学校生の学力をきちんと保証し、地域や保護者にも不安を与えないという意味からも少なくとも学力検査の行われていた5教科については、中高が連携した一人ひとりの学力の定着度の把握が必要とされ、その方法についての研究を行ってきた。

学習内容の定着度の確認とそのフィードバックは、その間隔が短いほど効果的であると考えられる。しかし、その場で授業で教えたことの定着度を確認し、その場で理解不十分な生徒に指導を加えることは実際問題として難しい。しかし、T・Tであれば、一人の教員が授業を進行している間に一方の教員が机間指導等を行って生徒のつまずきを早期に発見し、指導できる可能性がある。

中学校では、国語・社会・数学・理科・英語の5教科について、単元終了ごとに「単元別テスト」を実施し、基礎的・基本的事項にしばって、より短いスパンでの定着度の把握を行い、指導へのフィードバックを迅速化することによって生徒の基礎学力の向上に努めている。上記5教科の「定期テスト」も定着度の確認に活用している。中学校では、連携校の定期テスト問題の一部を共通化し、定着度の確認をするための成績資料作成を中1から高1まで一貫して行うことにした。定期テストの分析を行うために、中高で協力して「教科別診断表」という成績資料を作成している。（表2参照）

		得点						正答率								
配点		20	20	20	20			80		大問 1	大問 2	大問 3	大問 4	大問 5	大問 6	総合
目標ボーダー		10	10	8	8			36								
生徒番号	標準 得点	大問 1	大問 2	大問 3	大問 4	大問 5	大問 6	総合	単 元 名	○	△	◇	□			
									観 点 等	技 能	知 識 ・ 理 解					
a990301	59	20	14	16	14			64		100	70	80	70			80
a990302	49	10	8	14	8			40		50	40	70	40			50
a990303	52	13	14	13	12			52		65	70	65	60			65
a990304	65	20	17	19	13			69		100	85	95	65			86
a990305	53	12	14	18	9			53		60	70	90	45			66
a990306	64	20	15	18	14			67		100	75	90	70			84
a990307	45	7	6	10	8			31		35	30	50	40			39
a990308	48	14	10	7	6			37		70	50	35	30			46
a990309	56	16	18	14	14			62		80	90	70	70			78
a990310	57	19	14	13	17			63		95	70	65	85			79
a990311	53	12	15	14	12			53		60	75	70	60			66
a990312	58	18	16	18	11			63		90	80	90	55			79
a990313	65	19	18	16	18			71		95	90	80	90			89
a990314	63	17	17	15	19			68		85	85	75	95			85
a990315	68	19	18	18	20			75		95	90	90	100			94
学校	合計点	236	214	223	195			868								
	人数	15	15	15	15			15		15	15	15	15			15
	平均点(通過率)	15.7	14.3	14.9	13			57.9		79	71	74	65			72
	ボーダー未達人数	1	2	1	1			1								
	最高点(率)	20	18	19	20			75		100	90	95	100			94
最低点(率)	7	6	7	6			31		35	30	35	30			39	
連携校	合計点	1056	807	831	585			3279								
	人数	50	50	50	50			50		50	50	50	50			50
	平均点(通過率)	16.2	13.2	16.6	11.7			65.6		81	66	83	59			66
	ボーダー未達人数	3	5	4	2			3								
	最高点(率)	20	20	20	20			100		100	100	100	100			100
最低点(率)	5	5	5	4			25		32	25	20	20			25	

表 2 教科別診断表

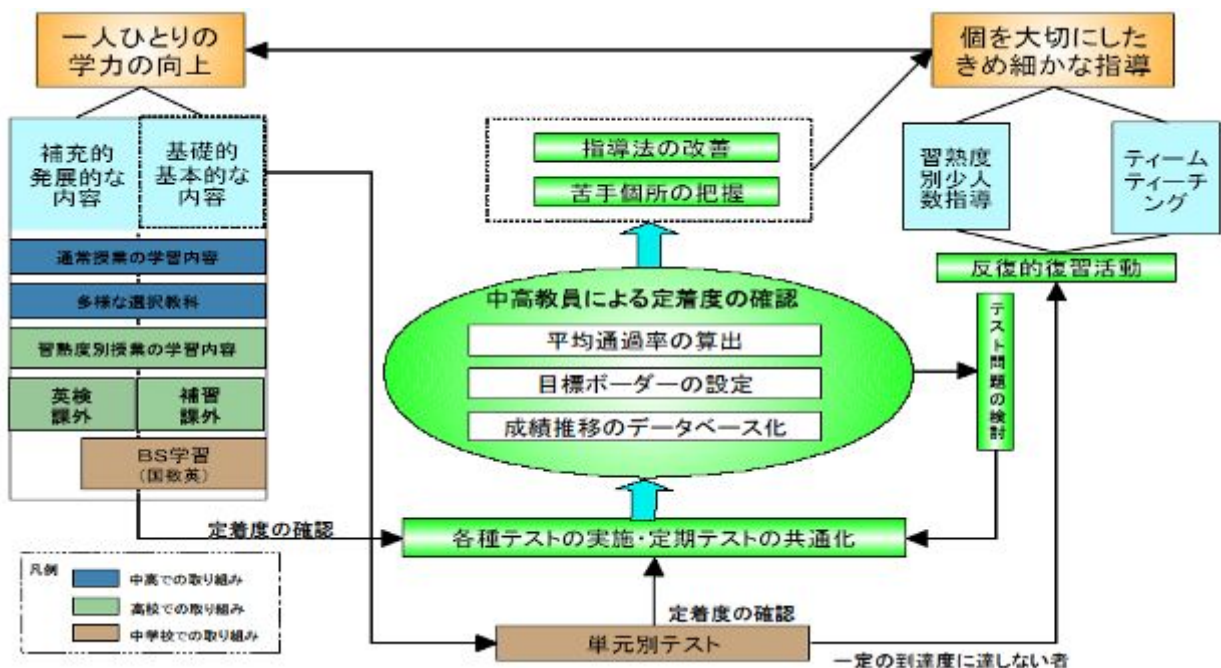


図3 定着度の確認と指導へのフィードバック体制

さらに長いスパンでの学力の定着度を確認するために中高で「基礎力診断テスト」を実施している。以上のような各種テストを用いた学力の定着度の確認方法とそのフィードバック体制を図示したのが上図である（図3参照）。

また、定期テスト後のデータ送付から「教科別診断表」作成までにかかりの日数を要するため、考査時に生徒がつまづいている箇所を直後の指導に生かし、さらに本地域の中学生の指導重点箇所を探り出す手段が必要となっていた。すべてが数字のデータである「教科別診断表」をより効果的に活用し、日頃の授業の指導力向上に資するために、昨年度から担当教員の採点上の気づきをまとめた「定期テストの感想・気づき」という一覧表も「教科別診断表」と同時期に作成し、生徒のつまづき箇所を発見しやすくするとともに、生徒の不得意分野の解明と日頃の指導との関連性を教員が自己評価できる機会にもなっている。

さらに、本年度は定期テストのデータを3中学校全体でまとめ、度数分布表を作成してより生徒の定着度や教員の指導へのフィードバックに活用する取組みを始めた。11月には県共通テストを利用して3中学校でデータを集約し、度数分布表を作成して生徒個人に配布することで、中学生はより大きな集団の中で自分の位置を確認できる機会となった。中学校教員からは、中学生の学習に対する意識が向上し大いに刺激になったと、大変好意的に受け止められている。また、中学校教員自身も自らの指導方法を改善する良いきっかけとなっているようである。学習は各個人で行うべきもので、競争心を煽りすぎると逆効果になってしまうが、母集団の小さな学校では、自らの現状を知り学習意欲をさらに高めていくことが非常に難しく、今回の度数分布表の作成および生徒への配布は、大変有効であったと考えられる。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ T・Tの実施により、その場で理解が不十分な生徒に即座に対応できる。○ 中高の教員間で、学力の問題について具体的な資料に基づいた話し合いができるようになった。○ 度数分布表の作成および配布により、中学生・中学教員ともに大いに刺激となった。	<ul style="list-style-type: none">○ フィードバックの効果的な方法について、さらに研修を深める必要がある。○ 基礎学力が他地域と比べてどのような傾向にあるのかを検討する必要がある。○ 高等学校における、データの有効的な活用方法の検討が必要である。

(ウ) 今後の展望

現在、中・高の5教科（国語・社会・数学・理科・英語）の担当教員を中心にデータの入力や分析を行っており、データの蓄積を行い、日々の指導の改善にフィードバックできるシステムを作り上げている。これにより、個人の成績の推移を取り出して活用することができ、生徒にとっても教員にとっても、学習を進める上での指針になる。また本年度作成した「定期テストの感想・気付き」を補完的に用いることで、データ分析をより意味のある生きたデータとすることが考えられる。引き続き、データの活用の取組みと一層の工夫・改善が課題である。

また、毎回のデータ集約に度数分布表を加えることで、より効果的に指導へのフィードバック体制をより強固なものにすることができると期待されている。今後さらに中高教員間での検討を重ね、生徒の学習の定着度をさらに図っていくためにも、以下に挙げる「周防大島高校が求める5教科の力」との関連性も探りながら、各教科で協議していく必要がある。

エ 「周防大島高校が求める5教科の力」の改善

(ア) 取組み

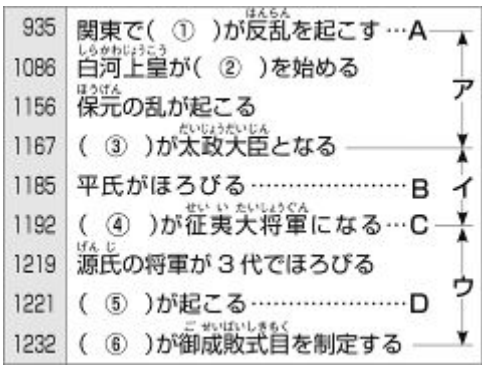
- 中高教員による「周防大島高校が求める5教科の力」（通称：ガイドライン）の改訂および活用方法の工夫・改善

高等学校では、平成14年度の入学者選抜から、連携中学校からの入学者の決定は、学力検査や調査書を用いず、面接や小論文等による、いわゆる『簡便な入試』となった。これを受けて昨年度は大島郡内の全ての中学生や保護者を対象にしたアンケートを実施し、連携型中高一貫教育に対する様々な視点が明らかにされた。その中でも、生徒の学力に関する保護者の意見を参考にし、中高の教員で協議を重ね、平成16年度に「安下庄高校が求める5教科の力」を完成させた。

以後、毎年改訂を重ね、少しずつではあるが、中学生が使いやすく自学自習にも適した形式に改良してきている。今年度は、主に中学教員の意見を参考にして大幅に改訂作業を進め、ほとんどの教科で従来の説明中心の記述から、問題演習形式へと改訂することができた。このガイドラインは、平成19年度から開校する山口県立周防大島高等学校にあわせて「周防大島高校が求める5教科の力」に改称し、来年度の新3年生に4月の段階で配布して、より早い段階から進路に対する意識を高めてくれることが期待されている。

(イ) 改訂の内容

		改訂内容
数 学	H 16	<input type="checkbox"/> 一次方程式・連立方程式・二次方程式を解くことができる。 <input type="checkbox"/> 関数のとる値の変化の割合を求めることができる。
	H 17	<input type="checkbox"/> 一次方程式・連立方程式・二次方程式を解くことができる。 <u>1・2・3年</u> <input type="checkbox"/> 関数のとる値の変化の割合を求めることができる。 <u>2・3年</u>
	本年度改訂	<input type="checkbox"/> 方程式（1年） (1) 1次方程式 $x - 7 = 2$ を解きなさい。（1年P. 68） (2) 1次方程式 $3x + 2 = 2x + 4$ を解きなさい。（1年P. 69） <input type="checkbox"/> 連立方程式（2年） (1) 連立方程式 $\begin{cases} x + y = 10 \\ x - y = 2 \end{cases}$ を解きなさい。（2年P. 34） <input type="checkbox"/> 関数 $y = x^2$ （3年） (4) 関数 $y = x^2$ について、 x が -4 から 1 だけ増加するときの変化の割合を求めなさい。（3年P. 93）
社 会	改訂前	4 中世の日本 <input type="checkbox"/> 平氏や源氏が、貴族にかわって政権をとっていく流れを大まかにつかむことができる。 <input type="checkbox"/> 日本に襲来してきたモンゴル民族が、どのように勢力を拡大していったかを推測することができる。 <input type="checkbox"/> 「倭寇」と呼ばれていた人々が、どこでどのような活動をしていたかを資料から読み取ることができる。 <input type="checkbox"/> 15世紀ごろ、中国・朝鮮・日本・琉球が、どのような関係・交流をもっていたかを考えることができる。 <input type="checkbox"/> 大内氏や毛利氏のような戦国大名が、どのように地方を支配し、発展させたかを考えることができる。 化学の基本的な原理・法則を知る。
	本年度改訂	2 中世の日本 <input type="checkbox"/> 平安時代の後期に平氏や源氏などの武士が勢力をもってきて、貴族に替わって政権をとるようになり、源頼朝は鎌倉幕府を開いた。 <input type="checkbox"/> 鎌倉時代の中国ではモンゴル民族が巨大な帝国を築き、2回にわたって日本に攻め込んだ。 <input type="checkbox"/> 鎌倉幕府の滅亡後、建武の新政とよばれる天皇中心の政治が始まったが、天皇が2人現れて動乱の南北朝時代へと突入した。 歴史的分野 演習問題 1 「武士の台頭と鎌倉幕府」 年表を見て、問いに答えなさい。 (1) ①～⑥にあてはまる語句を答えなさい。 (2) Bの平氏が滅んだ場所を答えなさい。 (3) Cの人物が幕府を開いた場所はどこか。 (4) 将軍と主従関係を結んだ武士を何というか。 (5) 朝廷の勢力回復をめざして、Dの乱を起こした上皇はだれか。
英 語	H 16	<input type="checkbox"/> 受動態の文を理解し、簡単な受動態の文を書いたり、話したり出できる。 （be 動詞＋過去分詞形：They are loved by everybody. など）



H 17	<input type="checkbox"/> 受け身 (～される) be 動詞 (is, am, are) + 動詞の過去分詞形 This book is written in English. This book isn't written in English. Is this book written in English? Yes, it is. / No, it isn't. ※ 過去分詞形は過去形と同じく ed をつければよいが、そうでないものもあるので覚える必要がある。 ※ 受け身文を過去にする場合は、be 動詞を過去形にする。 (例) This book was written ten years ago.
	<input type="checkbox"/> 受け身 be 動詞 (is, am, are) + 動詞の過去分詞形 (～される) (Everyone loves Tom.) (みんなトムを愛しています。) Tom () () () everyone. (トムはみんなに愛されています。) () English () in Canada? (英語はカナダで話されていますか。) English () () in Canada. (英語はカナダで話されていません。) ※ 過去分詞形は動詞により異なるので、教科書巻末の不規則動詞変化表などを活用しよう。 (paint → painted, speak → spoken など)

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高教員間で基礎基本となる学力についての議論が活発に行われた。 ○ 中学校と高校での指導の連続性や一貫性に対する意識が向上した。 ○ 中学校教員の意見により、中学生が自己評価しやすいように演習問題形式への改訂が行われた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ガイドラインで示された学習項目を今後どのような形で評価し、指導に生かして行くのかが大きな課題である。 ○ ガイドラインを今後いかに活用していくのかが最大の課題である。

(エ) 今後の展望

ガイドラインを作成して以来、幾度の改訂作業を行ってきたが、今年度は中学校教員の主導により、演習問題形式へと大幅に改訂された。これにより、中学校修了時の学力の確認用としてのみならず、日頃の授業においても、単元や項目毎に生徒の理解度を確認する手段として活用されることが大いに期待される。今後も今年度の実施状況を十分に踏まえ、中学生にとってより効果的で活用しやすいガイドラインを目指して改良を加えていきたい。

オ 6年間を見通した計画的な資格取得

(ア) 取組み

- より専門的な資格取得のサポートの実施
 - ・ 商業科 … 「情報処理検定」、「ワープロ実務検定」、「簿記実務検定」、「珠算・電卓実務検定」、「商業経済検定」(全て財団法人全国商業高等学校協会主催)
 - ・ 家庭科 … 「全国高等学校家庭科食物調理技術検定」、「全国高等学校家庭科被服製作技術検定」、「全国高等学校家庭科保育検定」、「訪問介護員・障害者(児)ホームヘルパー3級」

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 目標が明確になるので、主体的に学ぶ姿勢を育むことができる。○ 上位資格へのステップアップを果たすことで、生徒に達成感・充実感を味わわせることができ、より積極的に授業に取り組むことができる。○ 訪問介護員の資格については、実習における外部とのかかわりが多いため、公共心や職業に対する意識の高さがみられる。	<ul style="list-style-type: none">○ 連携3中学校の生徒数が減少し、男女共修や他学年合同の授業が増えてきているため、指導計画、評価の共通化を工夫しなければならない。○ 検定の合格を目標とした授業にならないよう、授業研究に努めなければならない。○ 家庭科を履修していない生徒の受検要望が増えてきたことへの対応を考えていかなければならない。

(ウ) 今後の展望

検定は、生徒に達成感・充実感を味わわせることができるため、さらなる学習への励みとなるものである。また、結果は生徒の学力をはかるのみでなく、教員の授業の成果を客観的にはかる材料となるので、授業研究の糧にもなり、教育効果は大きいと言える。今後も、教科指導と検定対策とのバランスを十分に考慮し、日々の授業研究に努めるとともに、検定受検の意義を早い段階から周知徹底させ理解させるための取組みがより一層必要になると考えられる。

カ 中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の取組み

中高一貫教育によって生じる「ゆとり」については、様々な視点に立った捉え方があるように思うが、本地域では、連携中学生の中学修了後から高校入学後の学習にスムーズに移行できるよう、効果的な「ゆとり」の活用方法について研究を行った。

(ア) 取組み

中学校修了後に週一回、連携3中学生に対して、数学科と英語科の教員による指導を安下庄高等学校で行い、生徒への指導及び生徒の学習のサポートを継続して行った。

a 数学科の取組み

数学科では、今年度「周防大島高校の求める5教科の力」の大幅改訂を行い、問題集形式に基本事項をまとめた。

その中の問題より事前に課題を提示し、2時間の授業を「テスト」と「解説」の2部構成で展開した。特に最近の入学生は計算力に課題があることが多いので、まずは数や文字の四則演算がしっかりとできるように、高校入学前に鍛錬を積むには大変有効であった。

b 英語科の取組み

昨年度、基本的な単語の学習から初歩的な文法事項まで指導内容をいくつかのステップに分け、中学生が各段階のチャレンジテストを受けて合格すれば次のステップの学習が行えるよう、個人の到達度・理解度に応じた指導を行い、今年度も引き続き行うことにしている。また、必要に応じて、グループ内での一斉指導形式で補足説明を行い、中学生が積極的に参加できるよう工夫して指導を行うことにしている。

さらに、高等学校で指導を行うため、高等学校の英語科教員全員が指導に参加している。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学校教員にも指導に加わってもらい、一人ひとりの生徒にきめ細かな指導が徹底できた。○ 中学生の苦手とする項目が、中高教員で共通理解できた。○ 学習習慣を確立する一助となった。	<ul style="list-style-type: none">○ 各チャレンジテストで取り上げる学習項目について、検討が必要である。○ 本年度作成したガイドラインの活用方法を検討していく必要がある。○ ガイドラインのどの項目を特に取り上げて指導するのか、また、どの程度まで指導していくのか、中高教員で十分な協議が必要である。

(ウ) 今後の展望

中学校から高校の学習へのスムーズな移行に関して、この学習会で各自の弱点を見つけ出ししておくことは非常に大切である。そのためにも、学習会を通して中高教員が生徒の学力を十分に把握し、適切な指導が行えるような体制を整える必要がある。今年度は中高教員が役割分担をして、中学生一人ひとりにきめ細かな指導を行うことができた。今後は、更に指導形態や指導内容に工夫を加え、連携中学生にとって高校生活への円滑な橋渡しができるよう、計画的に指導を計画・実践できるように検討していく必要がある。

(4) 「6年間を見通したテーマ学習」の取組み

～ 「郷土おおしま」の取組み ～

ア ねらい

「郷土おおしま」を「6年間を見通したテーマ」とし、総合的な学習の時間に取り組んでいる。その主なねらいは次のような能力や態度の育成にある。

- 自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的な判断によってよりよく問題を解決しようとする資質や能力の育成
- 学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度の育成
- 地域社会と関わりながら、郷土についての理解を深め、郷土の歴史や文化の継承と郷土を愛する心の育成

イ 中学校における取組み

各中学校によって、具体的な取り組み方については、様々であり、学校の規模、生徒の様子、環境に合わせた形で行っている。以下は本年度の安下庄中学校の取組みについてである。

(ア) 研究の形態について

本年度の「郷土おおしま」では、「自然と環境」「歴史と文化」「暮らしとふれあい」「交流とこれから」という4つの大きな枠組みにわけて実施した。

このうち、1年生は「自然と環境」について課題を設定し、2、3年生は「歴史

と文化」「暮らしとふれあい」「交流とこれから」の3テーマの集団に分かれ、その中で個人テーマを設定し、資料収集、フィールドワーク、考察等を行った。

(イ) ふるさと講演会の実施

2、3年生の課題設定については、どのテーマを選び、その中で個人テーマをどう設定するのかを考える必要がある。その前に、生徒たちに自分たちが住んでいる大島の現状をしっかりと理解させた上で、生徒たち自身が感じた疑問や課題意識をもとに絞り込んでいくことが望ましい。したがって、課題の設定にあたっては、ふるさとを理解するために、各テーマにかかわりの深い方を講師に招いて「ふるさと講演会」を3度実施した。

特に、2度目の講演会は、「大島の歴史と文化について」「大島の福祉について」「大島の産業について」の3つのテーマから、自分の興味関心のあるテーマを2つ選択して聴講し、大島に関する見聞を広げ、個人テーマ設定のヒントとした。

ウ 高等学校における取組み

(ア) 資料館めぐり

1年生を対象として大島郡についての理解をより深めるために、郷土にかかわりある資料館を訪問して学習した。

Aコース（旧東和町方面）… 陸奥記念館、周防大島文化交流センター

Bコース（旧大島・久賀町方面）… 日本ハワイ移民資料館、
久賀歴史民俗資料館

(イ) 特別講義の実施

周防大島町の中で、様々な分野で活躍されている方を講師に招き、専門分野の紹介や周防大島町の魅力などについての特別講義を1・2年生対象に実施した。今年度は、山口県立熊毛南高等学校教諭の伊藤徹男氏に「地域調査の進め方」と題して講演していただき、研究テーマ設定の視点や地域調査の方法などについて理解を深めることができた。また、選択講義として、「大島の昔のうたについて」「周防大島の万葉の植物」「周防大島の女性の暮らしを掘り起こす」など、郷土にかかわる各テーマを選択して聴講した。

(ウ) 職場体験の実施

研究テーマをより身近なものとして捉え、郷土に対する理解をより一層深めることを目的として、2年生全員が周防大島町の20の事業所や施設を訪問して、1日の職場体験を実施した。これは、「郷土おおしま」を研究していく上で一番の課題に挙げられてきたテーマの決定をより効果的に行うことがねらいであった。また、仕事を体験させてもらうことで、将来の進路について見つめ直す機会となることも期待される。

(エ) グループ学習

各自テーマを設定し、ある程度夏季休業中に調査が進んだ段階で、2学期に学年ごとに、進度別またはテーマ別にグループ分けし、研究を進めた。2学年は、テーマごとに大きく次の3つのグループに分けて学習する機会を設定した。

Aグループ 歴史・文化

Bグループ 福祉・医療・産業

Cグループ 環境・自然・その他

エ 評価について

(ア) 評価の観点

中学校	1 学年	○主体的に課題を発見する力 ○ふるさと「おおしま」を大切にする態度 ○情報の集め方・調べ方
	2 学年	○主体的・創造的な態度 ○多角的・総合的な考察力 ○人・地域社会との関係力
	3 学年	○主体的・実践的な態度 ○課題を解決する力 ○自己の在り方生き方を追求する力
高等学校	1 学年	○各自の興味・関心に応じたテーマを設定し、調査・研究を中心に進めて成果をまとめることができたか。
	2 学年	○地元で働く人々の生き方を参考にして、各自の興味・関心に応じたテーマを設定し、調査・研究を進めてパソコンでレポートを作成する。その際に考察を加えて自分なりの「提言」も考えて発表することができたか。
	3 学年	○自己の在り方生き方を見つめ直し、進路研究を深めることができたか。

(イ) 生徒の自己評価

毎時間の学習を記録した用紙をポートフォリオ形式で各自綴じていき、課題意識を持たせている。3年間の総合的な学習の時間の内容を1冊のファイルに記録することで、中学校での学習の積み重ねを意識できるように配慮した。また、学年の発表では、生徒同士による相互評価も取り入れた。

(ウ) 教員による評価

毎時間の学習の記録用紙、レポート、発表会の内容を中心に評価する。

オ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査の結果から現状における問題点について、自分なりの考察を加えることができた。 ○ 郷土への関心が深まり、地域に目が向くようになった。 ○ インターネットや本からの情報のみならず、現地調査を行ったり、地域の方にアンケートを取ったり、調査内容を写真に収めたりするなど、創意工夫を凝らした研究が見られるようになった。 ○ フィールドワークを積極的に行うことによって、総合学習に対する地域の理解度が高まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校時のテーマ学習を高校でどのように発展させるかについての検討が必要である。 ○ 「郷土おおしま」という大きな枠があることによって、生徒の興味が限定されてしまいがちである。「郷土おおしま」を基に、発展した課題を見つける必要がある。 ○ 生徒を十分に支援できるだけの教員の力量を高めていく必要がある。 ○ インターネットや文献による調査研究のみで終わらないよう、地域のネットワークをうまく活用する工夫が必要である。

カ 今後の展望

本来、総合的な学習の時間は様々な学習活動との連携を図り、弾力的な指導をもつ

て進めていくべきである。そのためにはまず、指導する側の協力体制と幅広い視野に基づいた様々な働きかけが求められる。現行の教育課程においてどうすれば、有効に授業時間を活用することができるのか、また、教員間の協力体制をどのように図っていくのかが問題となる。

また、今後さらに「郷土おおしま」の時間を充実させるためには、生徒自身の興味・関心や疑問、驚きなどを土台にして、「自分の生き方の自覚」に結びつくような課題の設定や活動を仕組んでいくことが最も重要であると思われる。

さらに、宮本常一が用いた研究手法であるフィールドワークに対する知識は、講演会や文化交流センターの活用などにより、生徒の間に定着しつつある。今後は、どうすれば生徒たちが得たフィールドワークの知識を実際の研究に生かし、さらに研究を深めていくことができるのかを、中高間での指導の連続性も視野に入れて協議を重ね、実践していきたい。

(5) 「体験的な学習を重視した学校行事」の取組み

ア ボランティア活動

以前は「ふれあいクリーン作戦」という名称で、4校が同一日に3地区に別れて中高合同で海岸清掃を実施していたが、一昨年度からは「ボランティア活動」に変更し、それぞれの地域において、学校・部活動または個人単位で行えるボランティア活動を積極的に奨励し参加している。「ボランティア活動」への名称変更に伴い、実施形態も変更されたため、この活動のねらいも見直すべきだという声上がり、昨年度、以下のようなねらいを設定した。

(ア) ねらい

- 中学校
身近なボランティア活動を通して、地域社会の一員として支え合い協力していこうとする思いやりの心を育て、学校の級友や地域の人々に主体的に関わろうとする態度を養う。
- 高等学校
身近なボランティア活動に主体的に参加することで、幅広い年齢層の人との関わりを持ち、豊かな人間関係の醸成を図るとともに、集団の一員としての自覚と責任感を育成し、郷土を愛する心を育てる。

(イ) 各校の取組み

学 校	主 な 内 容
安下庄中学校	○ 町主催の花火大会後のゴミの分別作業 ○ 学校周辺のゴミ拾い
日良居中学校	○ 学校近郊の海岸清掃活動 ○ 日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○ 県立養護学校の児童生徒のプール活動の介助
東 和中学校	○ 大島郡陸上競技大会での補助員 ○ 日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○ サザンセットロードレースの補助員

安下庄高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 町主催の花火大会後のゴミの分別作業 ○ 日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○ 日良居中学校秋季大運動会での運営補助 ○ 各種福祉施設・病院などでのボランティア ○ サザンセトロードレースの補助員 <p style="text-align: right;">他多数</p>
---------	---

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校間のボランティア活動に関する情報交換が頻繁に行えるようになった。 ○ 各校で実施したボランティア活動の情報を集約し、次年度に向けての参考にすることが出来る。 ○ 部活動などの小さな単位で活動が実施でき、迅速に対応することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生・高校生が共同で作業する場が持てるように、さらに積極的に活動の場を探っていく必要がある。 ○ 小・中・高での連携も視野に入れていく必要がある。 ○ 生徒への事前の情報提供を徹底し、自分の興味に応じた活動を幅広く選択できるように工夫すべきである。

(エ) 今後の展望

中高で定めた「ねらい」によって、中学校・高校それぞれのボランティア活動に積極的に取り組むようになってきたと思われる。今後は町の社会福祉協議会とも情報交換をしながら、より地域に密着したボランティア活動を模索し、中高間のみならず、小・中・高、ひいては周防大島町全体を巻き込んだ大きなボランティア活動の流れが醸成されることを願っている。

また、中学校・高校それぞれが、ボランティア活動後に生徒に感想を書かせているが、一人の生徒が中学1年生から高校3年生までどのようなボランティアを行ってきたのかが分かるものを作成し、6年間継続して持たせてみることを検討してみてもどうか、という案が担当者会議の中で出ていた。それを受けて、本年度は東和中学校の一部の学年で試行的に生徒にボランティア活動の感想をまとめて書かせてみた。今後は、中学校・高校で十分な協議を重ね、中高6年間での一貫した支援体制を考え直してみる必要がある。

イ イングリッシュキャンプ

(ア) ねらい

安下庄高等学校近郊の中学生2, 3年生及び、安下庄高等学校の生徒が、県内の外国語指導助手との英語を使用した様々な活動を通して、実践的語学力や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度及び異文化を理解し尊重する態度を身に付けることを目的とする。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 自分の英語が通じた喜びを中学生に実感させることができた。○ 中学生が英語学習に熱心に取り組む契機となっている。○ 外国の食文化を理解するために、ALTのレシピで昼食会を行い、異文化理解を深めた。○ ALTと生徒の手紙交換では、夜遅くまでかかって積極的に多くのALTに手紙を書いた生徒もいた。また、ALTから自分宛の手紙をもらい、喜ぶ生徒の姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none">○ 現在の活動で更に見直しや改善を進め、できる限り多くの中学生や中学校の英語科教員、さらにALTに、楽しんで参加してもらえる活動にしていく必要がある。○ より多くの連携中学校の生徒に参加してもらうため、活動をよりよく知ってもらう努力が必要である。○ 事前・事後を含めて、参加教員のより綿密な協議が必要である。

(ウ) 今後の展望

毎年、新たなALTも加わり、生徒のみならず教員にとっても得るものが多いセミナーとなっている。今後は、中学校教員の意見も参考にしながら、中学生が毎年参加しても飽きることのないキャンプを目指していく必要がある。本校のセミナーはALTと参加生徒の数がほぼ同数で、ALTを身近に感じる機会が多いことが特長として挙げられる。そのため、ALTとマンツーマンでポスターを作ったり、活動を行ったりすることが可能となっている。今後もこの特長を生かし、生徒がALTを身近に感じることで英語・異文化により興味を持たせることができるように、活動を改善していきたい。また、今年好評であった「食」を通して異文化を理解する活動を今後も続けていきたい。

ウ ふれあいマラソン大会

(ア) ねらい

マラソンを通して、心身の健全な発達や健康の保持増進を図り、自己管理に努める。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学生は高校生を目標にし、高校生は中学生に負けないという気持ちで走り、また連携中学校生同士も負けないという気持ちで走ることで、生徒のやる気呼び起こすことができた。○ 地域の人達が沿道から声援を送り、生徒は地域とのつながりを実感することができた。	<ul style="list-style-type: none">○ 大会当日の沿道での交通整理など、教職員・保護者・地域の人達で協力して、生徒の安全確保に努める必要がある。○ 大会の運営全般について、中高教員で十分に検討していく必要がある。

(ウ) 今後の展望

第7回ふれあいマラソン大会は、連携4校の教職員や保護者、地域の方々の御協力

により、無事終わることができた。

連携中学校出身の高校生は、中学校3年間の記録が蓄積され、過去の記録を参考にした目標の設定をスムーズに行うことができた。また、連携4校でレースを行うことで、日頃顔を合わせないもの同士がお互いを意識し、良い緊張感を持ってレースに挑み、記録向上につながっている。

保護者や地域の方々が、安下庄地区を爽やかに駆け抜ける生徒達に温かい声援を送っている姿をいたる所で見ることができ、この行事も7回目を迎え、地域に定着してきたように思える。

連携4校が一堂に会し、マラソン大会を実施することは、小規模校の3中学校にとって意義が大きく、今後、さらに中高一貫教育を地域にPRしていく必要がある。



中高生が健脚を競い合うマラソン大会

エ ふれあいみかん収穫作業

(ア) ねらい

- 中学生と高校生の交流を促進する。
- 地域の産業を理解し、勤労の貴さを体得し、職業観を確立する。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 高校生と中学生が協力して作業に当たることにより、中高間でのふれあいがしっかりできた。○ 作業をした各農家から、概ね良い評価を頂き、中高一貫校として地域社会への貢献という面で良いアピールとなった。○ 農家募集や連絡などの業務は各中学と分担して行ったため、連絡調整などもスムーズに行うことができ、円滑に準備を進められた。	<ul style="list-style-type: none">○ 今年は雨により順延し、順延日も少雨で作業実施の判断が難しかった。少雨の時の実施・中止などの決定方法の改善の必要がある。○ 来年度統合により生徒数が増加するが、農家の募集人員の増加があまり見込めないので対策が必要である。

今年度の収穫作業を終えた生徒、農家の方の感想をいくつか紹介しておく。

- ・中学生と高校生あわせて4人だったので大変だと思ったが、実際に作業をしてみるとあっという間に終わり、全部のみかんを採取できたとき、何ともいえない達成感があった。(中学女子)
- ・今年でふれあいみかん収穫作業に参加するのは最後だが、この行事はずっと続けて欲しいと思う。この作業を通していろいろなことが学べた。(高校男子)
- ・中高生が助け合い明るく働いてくださりました。終了7分くらい前、作業をやめようと声をかけたところ「この木がもう少しで終わる、皆できれいに仕上げよう」との声で中高生共に完了された。本当に力を合わせた姿に強く胸をうたれ、感動しました。(農家の方)

(ウ) 今後の展望

今年度も引き続き、中高での業務の分担などはしっかりできており、準備もスムーズに行われた。

来年度、統合により生徒数の増加が見込まれ、また、校舎も2校舎に分かれる。担当者の割り振りや事前指導などのあり方も考え直す必要がある。

農家の方には大変感謝され、来年度もお願いしたいと大半の農家の方に言っている。引き続きふれあいみかん収穫作業の円滑な実施を試みていきたい。



みかん収穫作業で農家の苦労を実感

オ 私の主張・郷土おおしま発表大会

平成13年度から実施している「郷土おおしま発表大会」は今年で6年目を迎えた。この発表大会は、中高合同による学校行事として定着し、中学校・高校の生徒会執行部が司会進行や補助を務めて大会を運営している。

(ア) ねらい

○「私の主張」発表大会

他学年や同学年の生徒の発表を通して、自己の在り方生き方を考え、自己をいっそう成長させようとする意欲や態度を育む。

○「郷土おおしま」発表大会

他の連携校生徒の発表を聞くことで、取組みの様子を知るとともに、自らの研究に役立てる。

(イ) 発表内容

a 「私の主張」発表大会

演 題	学 校	内 容
駅伝から学んだこと	東和中学校	駅伝を通じて学んだあきらめない気持ちと仲間の大切さ
心の成長	日良居中学校	相手を知り、自分を知ることがよりよい人間関係作りになる
二人の弟から学んだこと	安下庄中学校	サッカーに取り組む2人の弟から学んだ一生懸命取り組む姿勢の大切さ
祖母が遺してくれたもの	安下庄高校1年	祖母の遺した言葉や生き方から学んだ、命の大切さ
陸上部の目標	安下庄高校2年	陸上競技にかける思いと、目標実現のための決意
子どもに英語を教えたい！	安下庄高校2年	小学校での職場体験を通じて強くした将来の夢への思いと、実現に向けた努力

b 「郷土おおしま」発表大会

演 題	学 校	内 容
宮本常一と東和中の実践	東和中学校	1年間の研究結果と「総合的な学習検定試験」を実施するなどの東和中独自の実践を報告

周防大島から生まれた技術者 長州大工	日良居中学校	明治期に大島から、全国に出稼ぎした長州大工の功績と技術についての考察
災害と福祉	安下庄中学校	旧橋町でおこった災害を検証し、今後の災害に対する心構えと準備について提言
宮本常一の写真から	安下庄高校1年	宮本常一が昭和30～40年代に撮影した大島の写真と現在を比較し、人々の暮らしの変遷を検証
大島をPRするポスター	安下庄高校2年	インタビューやアンケートの結果から大島をPRするポスターを作製。これからの発展のために自分たちができることを考えてほしいと提言

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表大会に向けて、全員が身の回りのテーマについてあらためて考え、自分の意見をまとめたり、考察を加えたりする機会となった。 ○ 代表者の意見や発表を聞くことによって、各自が新しい視点に気づいたり、自分自身を振り返ったりする機会となり、発表をする生徒と聞く生徒ともに相乗効果が期待できる。 ○ 中高の生徒会が合同で司会を担当することで、中高の役割分担が明確化し、協力体制が強化された。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程の関係上、調査研究の時間の確保がなかなか難しい中、学年進行によって研究発表内容そのものをどのように深めていけるかについて依然課題が残る。 ○ 郷土おおしま発表大会については、パワーポイントとプロジェクターを使った発表形態に偏らないように、各校で工夫・改善する必要がある。 ○ 大会の運営や作業内容をマニュアル化することで、4校が今後さらに協力関係を深めていくことが期待される。



中高の生徒会が合同で司会を担当



中学生の発表の様子

(6) 「6年間を見通した進路指導」の取組み

進路指導部では、生徒一人ひとりが自己の在り方生き方を考え、将来に対する目的意識をもって主体的に進路を決定し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができる能力や態度を育成することを目標としている。そして、生徒一人ひとりの夢を実現させるために、次の2点を主眼としている。

- 生徒一人ひとりが具体的な夢を思い描ける力を養わせること
- 自分の夢を実現する方策を知り、継続的に努力する姿勢を養わせること

ア 進路指導目標

- 中高6年間を見通した段階的・継続的な学習活動やテーマ学習を通して、自己の特性や適性について理解し、自己の在り方生き方を考えつつ具体的な進路設計をする。
- 進路実現のためには主体的な学習が必要不可欠であることを自覚し、日々の学習習慣を確立させ、一人ひとりの学力の向上を図る。
- 様々な体験学習に積極的に参加することによって進路実現への意欲を高めるとともに、社会的視野を広げ職業観・勤労観を培う。
- 自己実現に向け、継続的な努力を続ける姿勢・能力を育てる。

イ 中高6年間の指導計画

	目標	学習内容	テーマ学習・体験的学習
中学1年	中学校の生活や学習内容を知り、将来の夢や生き方を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことの目的と意義を理解し、中高一貫教育等の制度と機会を知る ・中学校生活に慣れるとともに、心身の健康と安全な生活の実践力を身につける ・意欲的計画的に学習に取り組む姿勢を身につける 	オリエンテーション
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習
中学2年	自分の特徴や適性を知り、自分の力を高めながら、進路計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験等を通して、働くことの目的と意義を理解し、自分の進路計画を立てる ・自己を見つめる手だてを探り、集団と自己のかかわりについて考える ・学習の悩みに対する解決方法を探り、自分にあった学習方法を考える 	職場体験
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習
中学3年	自己の在り方生き方を考え、適切な進路を選択する	<ul style="list-style-type: none"> ・将来に対する具体的な目標を立て、夢の実現をめざすための高校生活を展望する ・先人(先輩)の姿に学ぶことにより、自他の不安や悩みの解決方法を探り、自己の在り方生き方について考える ・学ぶことの目的を明確にし、その姿勢の習慣化を図る 	高校見学、体験入学
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習

高校 1年	自己理解を深め、将来に対する明確な目標をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・こうなりたいという自分の将来像を描いていく過程において、自己の特性や適性を理解する ・将来の進路を見据えた科目選択の能力を身につける ・主体的継続的な学習の定着を図り、自分の学習スタイルを確立する 	安高セミナー
			進路適性検査
			ボランティア活動
			進路講演会
高校 2年	自分の目標を実現するための明確な進路計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験等を通して、社会に対する視野をさらに広め、将来設計について考える ・学校生活を見直し、校外活動等へ積極的に参加することにより、自己と社会のかかわりについて考える ・自分の進路に向けて、基礎学力の定着と応用力の養成を図る 	職場体験
			ボランティア活動
			オープンキャンパス参加
			進路講演会
高校 3年	自分で描いた将来像に基づいて自己実現を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の在り方生き方をふまえて夢の実現を追求する ・具体的な志望動機に基づいて学習を充実させる ・卒業後の新たなスタートにチャレンジしようとする意欲を高める 	ボランティア活動
			オープンキャンパス参加
			各種説明会

ウ 取組み

○ 中学校での中核的な取組み

1年	職業しらべ	自分の適性に気づき、身近な人の職業について調べることによって、将来の進路を計画しようとする態度を養う
2年	職場体験	身近な職場を体験することによって、働くことの目的と意義について考える
3年	上級学校訪問	自分の夢を実現できる進路の焦点化を図る

○ 高等学校での中核的な取組み

1年	職業研究	どのような職業に関心があるのか、文理選択とからめて検討する。
	ボランティア活動	社会に対する視野を広め、様々な体験を通して自己の在り方生き方を発見する
2年	ボランティア活動	
	オープンキャンパス参加	夢を実現するための進路を具体的に検討して、進路設計構築の一助とする
3年	オープンキャンパス参加	

○ 中学生を対象としたキャリアセミナー

安下庄高等学校の第3学年の進路内定者が連携中学校を訪れ、自分の進路決定までの体験を中心に高等学校での学習の取組みや部活動などの高校生活についての話をし、中学生が自己の在り方生き方について考える手がかりの一助としている。



安下庄中学校での発表の様子

エ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校教員による交流授業が定期的に行われており、中学生の進学意識を喚起する点でも効果がある。 ○ 高校生の進学内定者が中学校を訪問し、進路決定までの経緯や受験勉強の様子、高校生活のことなどを中学生に話すキャリアセミナーは概ね好評であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高間でより一貫性のある進路指導が可能か、その方法論について研究する必要がある。 ○ 将来設計能力を涵養できる進路支援について研究をする必要がある。 ○ 授業の予習・復習、家庭学習の習慣を定着させるために、各方面と連携して指導を徹底する必要がある。

オ 今後の展望

生徒一人ひとりが自分の夢を実現するためには、各人が具体的な将来設計図を描き、その実現に向けて努力していく環境づくりが不可欠である。また、生徒が夢の実現を図る場合に最も大切なものは本人の意欲であろう。この生徒が具体的な将来設計図を描く力と、自分の夢を実現するために主体的に取り組む意欲とは相互補完するものである。このことを念頭に、以下に挙げる課題に対する具体的な支援方法について検討していく必要がある。

- 基礎基本となる学力の充実・向上を図る
- 生徒自身が自らの在り方生き方について考えるきっかけとなる体験学習・進路に関する講演会や多様な職種 of 職業人の話を聞く場などを企画・設定する
- 自己実現のために必要な課題発見・解決力やコミュニケーション力、表現力の向上を図る

(7) 「6年間を見通した生徒指導」の取組み

ア 生徒指導目標

本地域において、生徒一人ひとりが自らの夢を思い描き、それを実現していくための支援として、生徒指導の立場から何ができるかを検討するにあたり、その大きな目標を以下のように定めた。

イ 中高6年間の指導計画

生徒指導目標を達成するための指導内容を検討する過程において、6年間の連続した流れの中で、生徒一人ひとりが自らをみつめ、アイデンティティを確立し、その上で夢を実現していくことができる能力と豊かな人間性とを身に付けるために、各学年で必要とされる発達課題や指導内容についての再検討を試み、「中高6年間の指導計画」と「生徒指導年間計画」を作成した。そして、この「中高6年間の指導計画」と「生徒指導目標」をもとに、十分な生徒理解に基づいた継続的で一貫した指導に努めてきた。今年度も、昨年度に引き続きこれらの目標や計画の実践を行いながら、より必要な修正を加える年であった。

	目 標	指 導 内 容	体験学習	関連活動
中学 1年	集団の一員として夢を持って生活する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな集団への適応を支援する ・ 基本的な生活習慣が身に付くよう、きめ細かな指導をする ・ カウンセリング等を通じて、能力・適性などの個々の情報の把握に努める 	私の主張発表大会 ふれあいみかん収穫作業 ふれあいマラソン大会 ボランティア活動	集団宿泊 職業体験学習
中学 2年	基本的な生活習慣の確立を図り、正しい判断力を養う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人ひとりが集団の向上に参加できるように配慮する ・ 基本的な生活習慣の確立を図り、正しい判断力を養う ・ 一人ひとりの心身の発達の差を考慮した援助に努める 		カウンセリング活動 修学旅行
中学 3年	自己の能力や可能性を認識する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の中での自分の立場を理解し、行動することができる力を育てる ・ 社会のルールを認識し、実践できる能力を育成する ・ 自分の不安や悩みを把握し、適切に対応できるよう支援する 		ボランティア活動 安高セミナー
高校 1年	自分を見つめアイデンティティの確立を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ふれあい活動」で培った人間関係を基に新たな集団を構築できるよう支援する ・ 社会の中の自分の立場を理解し、自己責任能力を高めるよう指導する ・ 連携校からの情報を基に、継続的なカウンセリング活動に努める 		修学旅行
高校 2年	自己を高め、主体的に生きていく姿勢を身につける	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者との関係の中から、自らを高める姿勢を養う ・ 自己指導能力と社会的な自己責任能力を育てる ・ 自己を相対化し、視野を広げる中で、悩みを解決する力を育めるよう支援する 		体育祭など
高校 3年	自己の在り方に明確な考えをもち、夢の実現をめざす	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一貫校の最上級生としての立場を理解し、リーダーシップが取れる力を養う ・ 民主社会を構成する市民としての自覚と責任を身につける ・ 自立した個人として生きていく力を獲得できるよう支援する 		

ウ 生徒指導年間計画

中高で一貫した生徒指導をめざすため、従来各学校で単独に行っていた様々な指導について、生徒指導に関連した行事と、生徒指導に密接な関係のある性教育及び人権教育をまとめ、6年間の中での位置づけを明確にし、一貫した指導を目指した(下表)。

(○学校行事、◎ホームルーム活動、※人権活動と関係が深いもの)

(ア) 中学校

	1年	2年	3年
4月	◎学級づくり	◎学年始めオリエンテーション ◎2年になっての中学生活	◎学年始めオリエンテーション ◎3年になっての中学生活
5月	○チャレンジキャンプ	◎生徒総会へ向けて	◎生徒総会へ向けて ◎修学旅行関係
6月	◎生徒総会へ向けて ○いのちの大切さを考える講演	◎生徒総会へ向けて ○いのちの大切さを考える講演	◎生徒総会へ向けて ※「岐路に立つ」 ○いのちの大切さを考える講演
7月	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方
8月			
9月	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ※差別について考える ◎運動会に向けて	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ※差別と偏見 ◎運動会に向けて	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ◎運動会に向けて
10月	◎文化祭に向けて	◎文化祭に向けて	◎文化祭に向けて ※平等な社会を目指して
11月	○ふれあいマラソン	○ふれあいマラソン	○ふれあいマラソン
12月	○ふれあいみかん収穫作業 ◎冬休みの過ごし方	○ふれあいみかん収穫作業 ◎冬休みの過ごし方	○ふれあいみかん収穫作業 ◎冬休みの過ごし方
1月	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会
2月	◎卒業式への取組み	◎卒業式への取組み	◎卒業にあたって ※人類愛
3月	◎2年生となる心構え	◎最上級生となる心構え	◎三年間を振り返って

(イ) 高等学校

	1 年	2 年	3 年
4月	○安高セミナー	◎ホームルームづくり	◎ホームルームづくり
5月	○生徒総会 ○旧担任によるカウンセリング	○生徒総会	○生徒総会
6月	○中学校教諭によるカウンセリング	○中学校教諭によるカウンセリング	
7月	○文化祭 ※人権意識調査・標語募集	○文化祭	○文化祭
8月	○ボランティア活動	○ボランティア活動	○ボランティア活動
9月	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭
10月	○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室 ○中学校養護教諭によるカウンセリング	○修学旅行 ○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室 ○中学校養護教諭によるカウンセリング	○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室
11月	○ふれあいマラソン ※高齢者問題	○ふれあいマラソン ○ふれあいみかん収穫作業	○ふれあいマラソン ※社会生活と人権問題
12月	○ふれあいみかん収穫作業	○ふれあいみかん収穫作業	
1月	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会
2月	※エイズと人権 ○中学校教諭によるカウンセリング	○中学校教諭によるカウンセリング	◎卒業にあたって
3月	◎2年生となる心構え	◎最上級生となる心構え	○卒業式

エ 取組み

○ 共通理解

(ア) 学級経営方針と指導計画の一致

各クラスの学級経営方針を中高6年間の指導計画に準じて作成し、指導の統一を図った。

(例) A中学校1年生学級経営案

平成18年度学級経営方針	
基本方針	<ol style="list-style-type: none"> 1 人権尊重の精神を基盤としていじめや不登校のないクラスの全員が落ち着いて笑顔で過ごせる温かい学級づくりをめざす。 2 集団生活の規律や礼儀などの意義を根気強く説き、将来豊かな社会生活を送るための基本的生活習慣の確立をめざす。 3 思いやりの心を培い、お互い助け合って生活できるように、道徳教育を充実させる。 4 自分の生き方をしっかり考えさせ、将来の進路選択にむけて基礎学力の充実をめざす。 5 勉強と部活動の両立を図り、意欲的で心身共にたくましい生徒の育成をめざす。
学級の実態	<ol style="list-style-type: none"> 1 性格や行動面・明るく活発な生徒が多いが、落ち着きにかける面がある。男女ともにリーダー的素質をもつ生徒もいるが、多くの生徒は進んで人前に出たり、意見を言うことを億劫がる傾向がある。敬語が使えないなど、言葉遣いが全体的に乱れている。 2 学習や学力面・授業中の態度は落ち着いているが集中力に欠ける生徒も多い。話の内容を理解しながら聞くことができていない。小学校中学年程度の学力がまだ身に付いていない生徒がおり、個人指導を必要とする。 3 身体や体力面・運動を得意とする生徒が男子に多い。 4 家庭や環境面・教育に対する保護者の関心は家庭によって差があり、放任気味の家庭もある。躰や学習など学校に依存しているところが多い。
経営の努力点	<ol style="list-style-type: none"> 1 生活ノート、観察、教育相談などを通して個々の生徒理解に努め、積極的な生徒指導に取り組む。 2 集団生活のルールやマナーを毎日根気強く指導する。 3 班活動を活発にし、日常の当番活動や学習活動の中で「連帯」「協力」の精神を培う。また、リーダーの育成にも努める。 4 学級通信などを通して、一方的なやりとりでなく、生徒と教師、家庭と教師を結ぶ意志疎通の道をつくる。 5 生徒が落ち着いて学級で学習し、生活できるように教室環境の整備を生徒自らの手でできるようにする。 6 家庭学習の方法や意義を説き、自主的な学習ができるように支援する。特に基礎学力の定着が不十分な生徒には個別に学習指導を行う。

○ 豊かな人間性の形成とアイデンティティの確立

少子化など様々な理由により、現代では年代が異なる世代間での交流が非常に希薄なものとなってしまった。その結果、リーダーシップや先輩を敬う気持ちが減退し、豊かな人間性の形成につながる体験が激減してしまったと言える。

我々は中高合同での体験的な学校行事により、生徒たちに世代を越えた交流とその体験から豊かな人間性が生み出されることを期待し、「体験的な学習を重視した学校行事」(p.27)で詳述されているようないろいろな取組みを実践してきた。今年度、改善を加え実践したことを述べてみたい。

(ア) ボランティア活動

平成15年度まで行っていたふれあいクリーン作戦は、平成16年度から各学校の地域の実情を生かしたボランティア活動へと発展的に解消した。その結果、小回りのきく地域のニーズに応じたボランティア活動になったため、地域の人々により感謝されるものとなり発展を続けている。特に高齢化の進んだこの地区での若い力のボランティアは、われわれの予想以上に頼りにされている。

(イ) 修学旅行（10月）

昨年度まで実施されていたハワイ修学旅行は、異文化を実体験できることで生徒の視野を広げ、人間性の成長に及ぼす影響は極めて大きいものがあった。昨年度は現地のワイメア高校に温かく迎えてもらい、様々なお互いの文化を紹介することで貴重な国際交流を実施することができた。

しかし、今年度は、保護者の負担増加に伴い旅行先が東京方面へと変更になった。

(ウ) ふれあいマラソン大会（11月）

暖冬の影響で比較的暖かい日であったが、それ以上に熱気あふれるマラソン大会であった。この大会も地域や生徒達にはすっかり定着しており、沿道での暖かい声援のなかで精一杯走る生徒の姿は地域を盛り上げ、また、レース前後に先輩後輩の間で談笑する姿は微笑ましく感じられた。

(エ) ふれあいまかん収穫作業（12月）

広い農園ではリーダーの高校生の指示が的確なほど作業が効率よく進むため、高校生のリーダーシップを育成するのにふさわしい行事である。今年度も昨年度同様、どのようなリーダーシップが求められているのかを高校生に自覚させる事前指導に時間を割き、生徒達の献身的な活動を引き出すことができた。

○ カウンセリング活動

(ア) 中学校教諭によるカウンセリング

昨年度と同様に高校1年生を主な対象とし、各中学校の教諭によるカウンセリング活動を実施した。放課後の時間を利用して中学校の教諭が来校し、相談室で実施した。例年、1学期はできるだけ最も親しみのある旧担任によるカウンセリングを実施しており、連携中学校出身の全ての生徒が訪れた。最初は全体での懇談会のような形になったが、その後、希望する生徒のカウンセリングを行った。また、このカウンセリングも定着してきたため、2、3年生も中学校の先生に挨拶をするなど、昨年度同様、たくさんの生徒が訪れたのが特徴であった。終了後、現担任を含めて教員間での情報交換を行い生徒理解に努めた。

(イ) 養護教諭によるカウンセリング

2学期には養護教諭部会と協力して、中学校の養護教諭によるカウンセリング活動を実施し、その後情報交換を行った。特に心身の発達を中心にかかわってきた養護教諭の視点からの生徒理解は、生徒にとっても教員にとっても非常に有意義なものであった。また、中学校時代に養護教諭との関わりが強かった生徒については、今後の対応等も検討することができた。

生徒の感想をいくつか紹介しておく。

- ・ これからの高校生活にやる気が出た。
- ・ 高校生活での緊張がほぐれた。
- ・ 中学と高校の違いを改めて実感した。
- ・ 久しぶりに出会えて懐かしかった。また、昔の自分を冷静に見つめ直すことができた。

○ 安高セミナー

今年度入学の43名は10校の中学校から集まっているが、その内7校は1学年1クラスの小規模な中学校の出身である。また、小学校から9年間にわたってほぼ同じ人間関係の中にいた生徒も多い。こういった新しい人間関係の構築に不慣れな生徒達にとって、高校入学直後の指導は非常に重要である。そのために設けた宿泊行事が「安高セミナー」である（今年度は4月13日～14日）。宿泊行事が生徒達の親睦に有効であることは誰もが知りながらも、授業時間数の確保や経済的な問題から実施できない学校が最近は多くなっている。幸い本校より6kmの位置に宿泊訓練施設である「大島青年の家」があるので、現地集合現地解散により経済的負担も少なく、また、入学時のオリエンテーションを兼ねることで授業時数への影響をできるだけおさえて実施している。

昨年度に引き続き今年度も、集団行動や規範意識、また本来は家庭で行われているべき基本的な生活習慣の徹底に力を注いだ。「大島青年の家」の全面的な協力のもと、アスピーからカッターボートまでの訓練をほとんどの生徒がやり遂げ、生徒達に新鮮な一体感、達成感が生じたことが感想から窺えた。また、セミナー終了後、ホームルームで異なる出身中学校の生徒達が談笑しているのを見るのは、大変嬉しいものである。

オ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ カウンセリング活動は定着しており、的確な情報交換ができただけでなく、高校1年生がスムーズに高校生活になじむための潤滑油にもなっていた。○ 各行事を通じて異年齢間のふれあいができ、また、新たな集団の中で良好な人間関係が形成できた。	<ul style="list-style-type: none">○ 生徒指導の効果を高めるために、中高で統一した基準を打ち出し、それに準じた指導を各校で行うことを検討する必要がある。

カ 今後の展望

カウンセリング活動が定着し、中高のつなぎの時期である高校1年生のケアや情報交換が充実してきた。今後も活動を継続していくことで、生徒理解、支援に努めていきたい。また、さらに生徒指導の効果を高めるためには、学級経営方針だけでなく生活指導や服装指導を中高6年間統一した基準の下で行うことが有効ではないかと思われる。これから協議を重ね、検討していきたい。

(8) 各教科での取組み

ア 国語科

～数値化できない学力充実の方法の研究～

(ア) 取組み

- 6年間を見通した古典の指導についての研究
- 思考力を高めるための読書指導についての研究
- 豊かな表現力を育むための指導についての研究
- 定期テストにおける共通問題を更に充実させるための研究

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学校と高校における古典学習が有機的につながり、指導の連続性が増すことになった。特に、「周防大島高校の求める5教科の力」で具体的な項目を挙げることによって、中高のつながりを強く意識することができた。○ 中学校での「朝の読書」の継続により、高校でも読書への抵抗感が少なくなり、読解力も向上し、思考力の基礎となっている。○ 適切に表現する力を育むための指導を、ホームルーム活動や特別活動と連携しながら、展開することができた。○ 定期テストの共通問題を観点別に設けることで、生徒の実態把握がより明確になった。	<ul style="list-style-type: none">○ 古典に興味を持たせる指導を、より工夫したい。○ 思考力をさらに伸ばしていくために、中学校および高校での日常的な読書指導を、授業等の時間を使って継続していきたい。○ 物事を多角的にとらえる習慣を身につけさせるために、学習形態を更に工夫する必要がある。また、6年間を通じて豊かな表現力を育むための連携した指導を工夫したい。○ 語彙の乏しい生徒のために、語彙を増やし、かつ、正確に理解する学習を増やしたい。○ 学力観についての共通理解を一層深めていきたい。

(ウ) 今後の展望

読む力、書く力を育てることは容易なことではない。何より生徒一人ひとりが様々な事に興味・関心を抱き、思索しながら日々を生きていく姿勢を獲得することが肝要である。そのために、中高で継続的に読書指導を行い、生徒達に読書の習慣を身につけさせることは、必要不可欠なものである。また、今後は表現力を豊かにするために、語彙を増やす指導を徹底していきたい。

イ 社会科

(ア) 取組み

- 中学校社会科公民的分野及び高等学校公民科「現代社会」における考查問題の比較・考察
- 中学校間で共通化した単元テストの結果等を参考に、中高での生徒の定着度の低い分野についての分析・考察
- ガイドラインの再検討

(イ) 成果と課題

a テストの結果の生徒へのフィードバックについて

中学校において、単元テストを積極的に実施し、その結果を速やかに授業に反映させることで、生徒の学力向上をめざした。年に数回の定期考査と比較して、生徒へのフィードバックが効率的に行える利点がある。また、比較的狭い範囲で実施する単元テストは、生徒にとっても目標が立てやすく、常に気を抜かずに勉強させるには有効な方法であるように思われる。

b ガイドラインの改定について

後期課程（高校）が前期課程（中学校）に求めるものがあるように、前期課程から後期課程に求めるものもある。

そのため、ガイドラインを作成する際に、3分野それぞれ中・高の教員が内容・問題について話し合い作成した。作成過程の中で、お互いにつけたい力や求めているレベルの共通理解をはかり、互いの授業に反映させることができると思われる。

(ウ) 今後の展望

連携3中学校では、昨年度同様、基礎学力の向上を目標にして単元テストの共通化に取り組んでいる。これは基礎・基本を定着させるのに有効なだけでなく、自主的に学習する習慣や意欲づけにもつながっていくと考えられる。この習慣を高校でさらに定着させることによって学力を向上させ、生徒一人ひとりが希望する進路を実現させたい。今後は高校卒業時の進路選択を意識した中高間の連携の在り方を追究していきたい。

ウ 数学科

(ア) 取組み

- 交流授業の取組みの工夫・改善
- 学力向上のための指導（ゆとりを生かした学習）

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 高校における授業は昨年度まで、発展コース1クラスと、基礎コース2クラスの計3クラスに編成して実施したが、今年度は各コース1クラスの計2クラスとした。これにより発展コースは数学Iで、基礎コースは数学I、Aの両科目で、週1回ずつ中学の先生とのT・Tを実施することとなり、基礎コースの受講者の指導が手厚く行えた。○ 中学における交流授業は、前年同様高校の教員が各中学校に週1回1時間、3年生の授業においてT・Tを行った。	<ul style="list-style-type: none">○ 中学での交流授業を、3年生だけでなく、1年生と2年生授業にも参加できるようにしたい。○ 来年度は普通科のクラス数が増える予定であり、高校での交流授業についてどのように設定するか、検討が必要である。

<p>○ ゆとりを生かした学習会では、学習会前に課題を与え、当日は課題の提出、課題テストの実施、採点・返却と問題の解説を行った。採点結果の返却を直ちに行うことにより、予習の必要性を感じさせることが出来た。</p>	
--	--

(ウ) 今後の展望

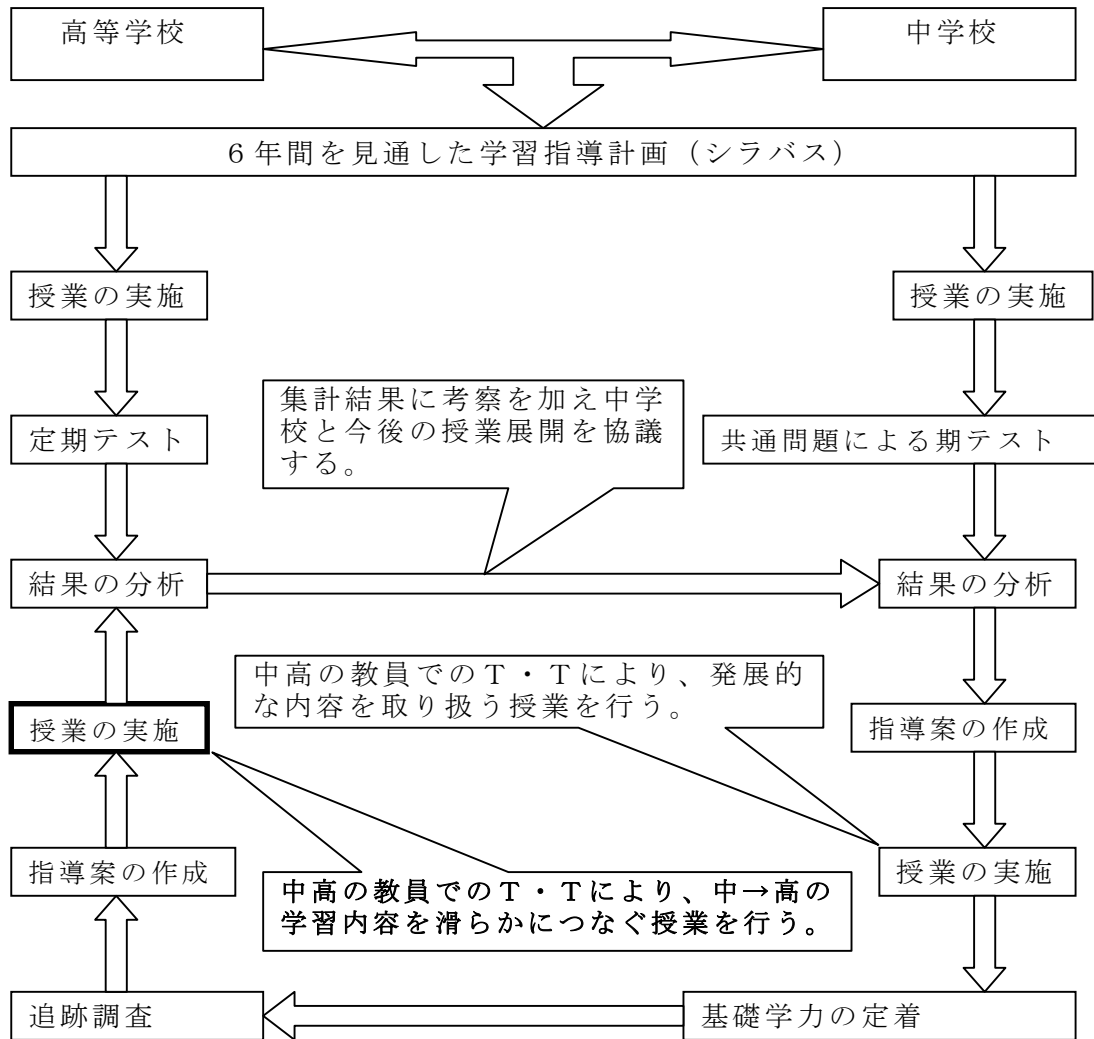
昨年度からの課題として「中学では数学担当教員が各学校とも一人であるため、異動により新たに来られた先生には連絡・確認を充分にする必要がある。」としていたが、本年度は異動が無かったこともあり、各校間の意思疎通も十分図られていたように思う。今後とも、異動の際には十分留意したい。

また、現在は中学での交流授業は3年生のみであり、3年次の1年間だけ高校の教員が授業に参加して来るという形態である。以前は交流授業を週に2時間とり、1時間は毎週3年生に、もう1時間は隔週で1年生と2年生に当てていた。このため中学校において3年間を通して交流授業を行ったという形になり、高校の教員にとっても、中学生にとっても、中高一貫教育という実感を得られていたように思う。

エ 理科

～基礎学力定着システムについて～

(ア) これまでの取組み



6年間を見通した学習指導計画（高校ではシラバス）をもとに、連携中学校間の定期テストの共通化とテスト結果の分析をし、「なぜ原子や分子の学習が定着しないか」から端を発し、「発展的な内容により興味をつなぐことができるのではないか」、そして「どのような内容を学習に取り入れるか」を検討し、中学生に対し発展的な内容の学習を高校の教員とのT・Tを取り入れることがより効果的であるとの一つの結論に達し、中学生に対して行ってきた。

昨年からの取組みとして、高校での【結果の分析】から高校での【授業の実施】にフィードバックする過程で、中学校の教員とのT・Tを取り入れ、【中→高の学習内容を滑らかにつなぐ授業を実施】した。単元は、理科総合Aの物理分野の「力学的エネルギー」で、過年度の高校の定期考査のデータの分析により、これまで定着度の低かった「加速度の概念と力の関係」について生徒の理解を深めることを目標とし、【中高の教員でのT・Tにより、中→高の学習内容を滑らかにつなぐ授業】を行った。その効果として、高校1年生に中学校で学んだことが、高校に行っても関係するのだという意識を確認させることが出来た。

(イ) 今年度の取組み

今年度も、物理分野では昨年度に引き続き「力と仕事の関係」と、化学分野では「物質の変化」でそれぞれ高校1年生を対象とした【中高の教員でのT・Tにより、中→

高の学習内容を滑らかにつなぐ授業】に取り組んだ。

事例 1：化学分野

山根大介（T 1：安下庄高校教諭）、角田善彦（T 2：安下庄中学教諭）

物質について学習していないため、物質を用いずに、滴下した水酸化ナトリウムの体積が水素イオンの数を示すことを、モデル図を用いて理解させ、滴下した水酸化ナトリウムの体積から酢酸の濃度の大小が判別できることに気づかせる。また、イオンのモデル化に達するまでにつまづく生徒が多いと予想されるため、プリントの図やイラストに工夫を加えた。実験中は中学校教員とのT・Tにより机間巡視を行い、実験操作についての理解が不十分な生徒には適宜アドバイスをし、実験操作を着実に習得させるとともに、安全に実験するための器具の操作や薬品の取り扱いを理解させる。また、班毎の話し合いでも中学校教員とのT・Tにより机間巡視を行い、各班で積極的に意見が出るように指導していく。

(手順)
① 食酢を10倍に希釈したものが入っているビーカー（10ml）と（20ml）を取り、水酸化ナトリウム水溶液で滴定する。水酸化ナトリウムの濃度は一定である。フェノールフタレイン液を3〜4滴食酢のビーカーに入れ、水酸化ナトリウムを滴下していき、赤色が消えなくなったら、滴下をやめる。

滴下した水酸化ナトリウム水溶液の体積 = 「終わりの目盛り」 - 「はじめの目盛り」

② 濃度のわからない4種類の酢酸が入ったビーカーから1つ選び、滴定に要した水酸化ナトリウムの体積を記録する。..... () ml

B	Aに蒸留水を10ml加えて20mlにした。
C	Bを10ml使用した。
D	Cに蒸留水を10ml加えて20mlにした。
E	Dを10ml使用した。

プリントの抜粋



授業風景

事例 2：物理分野

山根大介（T 1 安下庄高校教諭）、松村道夫（T 2 東和中学校教諭）

中学校において、仕事や仕事率はあまり詳しく扱われていない。エネルギーについては、エネルギーの種類や相互変換、保存について、仕事を用いて定義することなく、定性的に学んできている。

本時では、斜面を利用して、台車の登る角度を緩やかにすると、それを引くのに必要な力は小さくてすむが、ある重さの物体を一定の高さまで持ち上げる、という仕事をしている事には変りはない事を実感させる。また、作図による仕事の確認によって、「ある仕事をする時、道具を使う事で必要な力を小さくする事ができるが、仕事をする距離は長くなるので、結果的に仕事の量は変化しない」という「仕事の原理」を理

解するとともに、「仕事の原理」が、小さい力で同じ大きさの仕事をするために、色々な場面で様々な方法や道具に利用されている事を気づかせる。

実験中は中学校教員とのT・Tにより机間巡視を行い、実験手順についての理解が不十分な生徒には適宜アドバイスをしていく。また、班毎の話し合いでも中学校教員とのT・Tにより机間巡視を行い、各班で積極的に意見が出るように指導していく。

作図による仕事の確認

重さ2Nの物体を3mの高さに引き上げるのに3種類の斜面を考えてみよう。
斜面の長さは1mを1cm、物体の重さには、1Nを1cmの矢印として、作図をしてみよう。

<作図の手順>

- ① 各物体の重力を書き込む。
- ② 各重力を斜面に沿って分解し、斜面方向の力を作図する。
- ③ 斜面方向の力の大きさ、斜面の長さを測定して、表に記入する。
- ④ 斜面方向の力の大きさと斜面の長さの積を計算し、表に記入する。

<結果>

	AB	AC	AD	HD
斜面方向の力 (N)				
斜面の距離 (m)				
力×距離 (J)				

プリントの抜粋



授業風景

(ウ) 今後の課題

中学校と高校の教科書の内容とのギャップを感じ、中学生がスムーズに高校で学ぶ概念に入れるように、今後もこのギャップを中高の教員で協力して埋めていく必要を感じた。

オ 英語科

(ア) 取組み

- 中学校におけるE S英会話の授業内容の充実・発展と、高校教員の指導方法の工夫・改善
- 中学校・高校における基礎英語力の増強
- 英語技能検定試験の合同実施
- スピーチコンテスト、英語による面接練習でのALTによる指導
- 定期テスト問題や交流授業における授業案等の情報の共有化
- ガイドライン作成による中高教員の情報交換の活発化

E S 英会話の授業内容の充実・発展のため、本校高校教員が中学校での郡所属のA

L TとのT・Tによる授業を参観し、これからのT・Tの在り方について議論した。

また、中学校・高校における基礎英語力の増強のため、今年度は、高校教員がT 2として加わる中学校での授業をE S英会話のみでなく通常の英語の授業とした。また、中学校教員がT 2として加わる高校での授業を引き続き英語I（グラマー）とした。また、高校生の基礎英語力増強のために週1回の英単語小テストや、英単語週末課題を課した。

さらに、英語技能検定試験については、今まで人数が規定以上集まらず開催することができなかった回があったが、4校の合同実施により、生徒が受検する機会が増え、その結果、英語に対する意識が向上した。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高共に相互の指導内容や生徒の学習の進捗状況が把握でき、自校で補強すべき点が明確になった。 ○ 中高共に交流授業において、基礎英語力の増強を試み、生徒の実態を把握することができた。 ○ 高1の授業について、中学校教員が、中学校での既習事項を説明してから本時の授業内容に入るというスタイルができ、高校の授業内容への移行がスムーズに行えた。 ○ 高校所属のA L Tが週に1度のペースで中学校へ訪問できるので、中学生にとっては貴重な体験となっている。 ○ スピーチコンテストや英語面接指導については、文章校正から発音指導まで、中学生、高校生ともにA L Tからの直接指導を受けることができ、生徒の英語力が向上した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T・Tの指導法の改善が必要である。 ○ 各授業の前の中高教員間の十分な協議時間の確保が必要である。 ○ 中学校の通常授業に加わる際、A L Tの活用法を議論していかなければならない。 ○ 高校所属のA L Tが今年度日良居中学校へ訪問することができなかった。

(ウ) 今後の展望

今年度ガイドラインの改訂が進んだが、中高ともにガイドラインを活用し、内容を充実させるために、中高教員相互の協議をさらに深めていくことが重要である。

T・Tについては、中学校の通常授業とE S英会話、高校の英語Iの授業で行っているが、各学校の時間割作成上の制約などから、事前に十分な協議時間を確保することが難しかった。

A L Tについては、本校所属のA L Tが各中学校に訪問しているが、昨年度から始まった、週に1日の久賀高校への訪問や本校での授業数（11時間）、中学校での授業2時間の授業に移動の時間を含めた計4時間の時間確保のため、時間割を変更することが非常に困難になっている。そのため、今年度は日良居中学校への訪問は叶わな

かった。加えて、今年度は本校での英会話の授業でのALTとのT・Tを1時間減らして対応した。来年度は、どの学校でも最大限ALTが活用できるように、多方面に渡る条件整備が望まれる。

カ 音楽科

(ア) 取組み

- 専門性を活かした効果的なT・Tの在り方についての研究・実践

(イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 合唱指導におけるパート練習で、T1・T2がそれぞれ女声・男声パートに分かれて範唱をしながら指導することで、発声のイメージが明確になり効率の良い練習ができる。 ○ 器楽の指導において、個別に時間をかけて指導することができ、早い段階で問題点に気づくことができる。 ○ 中学生の音楽に対する関心や技能を把握することができ、高校での指導の際に、より個に応じた指導が展開できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T1・T2が共に男声の場合は女声パートがイメージを作りにくいこともある。 ○ T1・T2で指導のポイントを共通理解し、すべての生徒に対し一定以上の指導を行う必要がある。 ○ パート練習では時間ごとに指導するパートを変え、ひとりでも多くの生徒とかかわりを持てるようにする必要がある。また、パート練習の際にも、個々の生徒に目を向け、個別に指導する必要がある。

(ウ) 今後の展望

T・Tによる指導では、T1・T2それぞれの専門性を生かすことのできる授業を行っていききたい。そのためにも、歌唱・器楽・鑑賞・創作の分野より、バランスよく適切な教材を選択し効果的な指導を行っていききたい。

歌唱指導ではT1・T2が女声・男声それぞれの範唱をすることで、基礎的な発声の技術を伸ばして行きたい。器楽の指導においては、個別指導を中心にし、個々の問題点に気づき効率の良い指導を行いたい。鑑賞・創作の指導では、生徒が自ら積極的に学習活動に取り組むことができるような、説明や発問を考えていきたい。

中学生・高校生のそれぞれの発達段階を踏まえての、生徒一人ひとりの音楽に関する能力・適性、興味・関心を把握し、系統的な情操教育を行っていききたい。

キ 保健体育科

(ア) 取組み

- 柔道の授業における練習方法及び指導方法の工夫・改善

連携校では、柔道を武道の共通選択種目とし、中学校で得た柔道の技能を、いかにして高等学校で発展させるかをテーマに研修を重ね、柔道の基礎・基本から発展した指導方法まで共通化し、実践研究を行ってきた。

連携4校の保健体育科の教員が昨年度、今年度で5名中4名が入れ替わった為、今年度は、これまでの研修で積み重ねてきた、柔道の授業における指導方法や、共通化した内容などを再確認し、共通理解の徹底を図った。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 連携校において教科の評価や指導方法が共通化できるようになった。 ○ 連携校の生徒の基礎体力や技術等が確認できるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 連携3中学校の生徒数が減少し、男女共修や他学年合同の授業が増えてきているため、指導計画の共通化を工夫しなければならない。

(ウ) 今後の展望

指導方法や練習内容などこれまでの研修で共通化した内容を再確認し、共通理解することができた。しかし、連携校以外の中学校からの入学や、連携校の生徒数の減少等もあり、高等学校での柔道の授業の進め方をさらに工夫していく必要がある。

今後は中高一貫ストレッチや柔道の授業など、連携校が共通して取り組んでいる内容のさらなる定着を図り、高等学校入学後、連携校の生徒がリーダーシップを取り、授業を盛り上げていけるよう工夫、努力をしていく必要があると考える。

4 おわりに

本年度は橘・東和地域の連携型中高一貫教育が開始されて6年目の節目の年となった。学力充実システムにおける様々な取組みや学校行事等の日頃から地道な取組みは随分と定着してきたように思われる。週時程表に位置づけて実施している相互交流授業では、事前・事後の打ち合わせを徹底するように中高教員が連絡を密に取り合う努力をしている。また、本年度から作成した度数分布表は、生徒の学習に対する意欲を向上させるよい刺激となったようである。さらに、学校行事における中高の役割分担の明確化が従来から懸案事項となっていたが、学校間の相互理解・努力と連携の深まりの甲斐あって、本年度の私の主張・郷土おおしま発表大会において中学校・高校の生徒会合同による司会進行が実現した。6年目を迎え、ともすればマンネリに陥りやすくなりがちだが、この現状に満足することなく、少しでも生徒に実りの多い実践を行っていかうとする中高全教職員の熱心な取組みの成果であると確信している。

以下に、来年度の目標をいくつか挙げておく。

- 周防大島高校としての、新たな中高一貫教育のシステム作りの検討および模索
- ガイドラインの活用方法の改善と事例集作成
- 中高合同による生徒指導体制の充実

まず、来年度から安下庄高校と久賀高等学校が統合されて、新たに周防大島高等学校がスタートする。新高校においても中高一貫教育は継続されていくが、今までの取組みのすべてが来年度以降も行えるかどうかは、十分に検討していかなければならない。特に、教育課程や学校行事、交流授業など、新たに加わる久賀中学校と十分に検討し、一つ一つ解決していかなければならない。

次に、本年度改訂したガイドラインは、従来の形式と大幅に異なり、問題演習形式が中心となった。これにより、中学生が各項目の理解ができているか否かの判断がつきやすくなり、自己の到達度をより確認しやすくなった。このガイドラインを来年度の新3年生に配布し、生徒に活用を促すと共に、教員も日頃の授業や単元終了時に積極的に活用し、その成果を年度末に事例集にまとめることにしている。

さらに、来年度の周防大島学校の開始に合わせ、中高の生徒指導部が協力して指導体制をより充実させていくことにしている。新高校がスタートするということもあり、落ち着いた環境の中で学校生活を送れるように中高教員がサポートし、生徒が学習や学校行事、部活動等にしっかりと打ち込むことが期待されている。そのため、中高間の情報交換をより緊密に図り、生徒指導体制の共通理解を深めていくことが重要となってくる。

来年度の周防大島高校のスタートに合わせ、現在の中高一貫教育の様々な取組みについての再検討が行われている。これは、今までの取組みにどう久賀中学校に入ってもらおうのかという検討であると同時に、今までこの地域で行われてきた様々な取組みのうち、どれを継続してどれを変更していくのかという議論になっていくことが予想される。これまでも学校行事の精選や学力充実システムの改善等で中高教員が協議を行ってきたが、来年度の協議は、本地域のすべての中高教員にとって、これまでの取組みを振り返る良い機会になるものと思われる。開始以来基礎学力の向上を目指した学力充実システムをはじめ、各種学校行事や各分掌における取組みのすべてに意義があり、それによる生徒の変容が見

られてきた。しかし、学校の枠組みが変わろうとしている現在、新たな視点と新たな体制で臨むことが求められているように思われる。これまで積み上げてきた中高一貫教育の実績を再検討し、新たな方向へと一歩を踏み出して行く覚悟が必要となってくる。本地域の全教員が中高一貫教育の原点に立ち戻り、これからこの地域の生徒をどのように育て、どのようなサポートを行っていくべきかを、広い視野に立って考えていかなければならない。

参考資料

橘・東和地域中高一貫教育 教育課程（平成14年度～平成17年度）

◎移行期（H14年度）

○中学校部分（新学習指導要領）

学年	100	200	300	400	500	600	700	800	900	980				
1年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術・家庭	外国語	BS	総合的な学習の時間	道徳 特別活動		
2年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術・家庭	外国語	BS	SS		ES	総合的な学習の時間
3年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術・家庭	外国語	BS1	BS2		SS	ES

○高等学校部分（旧学習指導要領）

学年・類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1年 共通	国語Ⅰ			政経			数学Ⅰ・A			化学ⅠB			英語Ⅰ			OCA		生活一般		保健		体育		音楽Ⅰ		美術Ⅰ		書道Ⅰ		総合的な学習の時間 ホームルーム活動		
2年	I型	現代文		古典Ⅰ		世史A		生物ⅠB		英語Ⅱ		生活一般		保健		体育		日史B		地理B		数学Ⅱ		米語会話		音楽Ⅱ		美術Ⅱ			書道Ⅱ	
	II a型	現代文		古典Ⅰ		世史B		数学Ⅱ		数学B		生物ⅠB		米文化理解		英語Ⅱ		生活一般		保健		体育		日史B		音楽Ⅱ		美術Ⅱ			書道Ⅱ	
	II b型	現代文		古典Ⅰ		世史A		数学Ⅱ		数学B		英語Ⅱ		生活一般		保健		体育		日史A		地理A		物理ⅠB		音楽Ⅱ		美術Ⅱ			書道Ⅱ	
3年	I型	現代文		生物ⅠB		ライティング		リーディング		文書処理		RS		体育		日史B		地理B		古典Ⅱ		OCCB		音楽Ⅱ		美術Ⅱ		世史B				
	II a型	現代文		古典Ⅱ		世史B		数学Ⅱ		生物ⅠB		ライティング		リーディング		体育		日史B		地理B		数学Ⅰ		音楽Ⅱ		美術Ⅱ		書道Ⅱ				
	II b型	現代文		古典Ⅱ		数学Ⅲ		数学C		数学B		化学Ⅱ		ライティング		リーディング		体育		日史B		世史B		物理Ⅱ		音楽Ⅱ		生物Ⅱ				

◎移行期（H15年度）

○高等学校部分（第1学年：新学習指導要領，第2・第3学年：旧学習指導要領）

※中学校部分は、平成14年度と同一

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32			
1年 共通	国語総合			現社			数学Ⅰ			数学A			理科総合A			英語Ⅰ			OCI		家庭基礎		情報A		保健		体育		音楽Ⅰ		美術Ⅰ		書道Ⅰ		総合的な学習の時間 ホームルーム活動
2年	ブラクティカル	現代文		古典Ⅰ		世史A		生物ⅠB		英語Ⅱ		OCCB		生活一般		保健		体育		日史B		音楽Ⅱ		数学Ⅱ		米語会話		美術Ⅱ		書道Ⅱ					
	アカデミックa	現代文		古典Ⅰ		世史B		数学Ⅱ		数学B		生物ⅠB		OCCB		英語Ⅱ		生活一般		保健		体育		日史B		音楽Ⅱ		美術Ⅱ		書道Ⅱ					
	アカデミックb	現代文		古典Ⅰ		世史A		数学Ⅱ		数学B		英語Ⅱ		生活一般		保健		体育		日史A		地理A		物理ⅠB		音楽Ⅱ		美術Ⅱ		書道Ⅱ					
3年	I型	現代文		政経		生物ⅠB		ライティング		リーディング		文書処理		RS		体育		日史B		地理B		古典Ⅱ		数学Ⅰ		OCC		音楽Ⅱ		美術Ⅱ		世史B			
	II a型	現代文		古典Ⅱ		世史B		政経		数学Ⅱ		生物ⅠB		ライティング		リーディング		体育		日史B		地理B		数学Ⅰ		OCC		音楽Ⅱ		美術Ⅱ		世史B			
	II b型	現代文		古典Ⅱ		政経		数学Ⅲ		数学C		数学B		化学Ⅱ		ライティング		リーディング		体育		日史B		世史B		物理Ⅱ		音楽Ⅱ		生物Ⅱ					

◎移行期（H16年度）

○高等学校部分（第1・2学年：新学習指導要領，第3学年：旧学習指導要領）

※中学校部分は、平成14年度のものと同じ

学年・コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32													
1年 共通	国語総合		現社		数学I		数学A		理科総合A		英語I		O C I		家庭基礎		情報A		保健		体育		音楽I		美術I		書道I		総合的な学習の時間	ホームルーム活動															
2年	ブラクティカル	現代文		古典		世史A		生物I		英語II		O C II		情報処理		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		数学II		ビジネス基礎			服飾文化		書道II		素描I		音楽理論								
	アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		生物I		米語会話		英語II		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		地理B			書道II		素描I		音楽理論										
	アカデミック 理科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		化学I		英語II		保健		体育		日史B		地理B		音楽II		美術II		物理I			書道II		素描I		音楽理論										
3年	ブラクティカル	現代文		倫理		生物I B		ライティング		リーディング		文書処理		R S		体育		日史B		古典II		数学II		O C C		世界史A		簿記			情報処理		家庭看護福祉		服飾文化		書道II		素描I		音楽理論				
	アカデミック a	現代文		古典II		世史B		倫理		数学II		生物I B		ライティング		リーディング		体育		日史B		古典II		数学II		O C C		世界史A			簿記		情報処理		家庭看護福祉		服飾文化		書道II		素描I		音楽理論		
	アカデミック b	現代文		古典II		倫理		数学III		数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		日史A		古典II		数学II		O C C		世界史A			簿記		情報処理		家庭看護福祉		服飾文化		書道II		素描I		音楽理論		

◎完全実施期（H17年度）～

○高等学校部分（新学習指導要領完全実施）

※中学校部分は、平成14年度のものと同じ

学年・コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32													
1年 共通	国語総合		現社		数学I		数学A		理科総合A		英語I		O C I		家庭基礎		情報A		保健		体育		音楽I		美術I		書道I		総合的な学習の時間	ホームルーム活動															
2年	ブラクティカル	現代文		古典		世史A		生物I		英語II		O C II		情報処理		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		数学II		ビジネス基礎			服飾文化		書道II		素描I		音楽理論								
	アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		生物I		米語会話		英語II		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		地理B			書道II		素描I		音楽理論										
	アカデミック 理科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		化学I		英語II		保健		体育		日史B		地理B		音楽II		美術II		物理I			書道II		素描I		音楽理論										
3年	ブラクティカル	現代文		化学I		リーディング		O C II		フードデザイン		体育		日史B		数学II		古典		ライティング		簿記		マーケティング		文書デザイン		マルチメディア表現			簿記		家庭看護福祉		服飾手芸		書道II		素描I		音楽理論				
	アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		化学I		生物II		ライティング		リーディング		体育		日史B		古典		ライティング		簿記		マーケティング		文書デザイン			マルチメディア表現		簿記		家庭看護福祉		服飾手芸		書道II		素描I		音楽理論		
	アカデミック 理科	現代文		古典		政経		数学III		数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		日史A		古典		ライティング		マーケティング		文書デザイン			マルチメディア表現		簿記		家庭看護福祉		服飾手芸		書道II		素描I		音楽理論		

注

◎移行期（H14年度）教育課程について

○中学校部分

- ・BSは、「ベーシックスタディ」、SSは、「スキルスタディ」、ESは、「エクスプレッションスタディ」の略

○高等学校部分

- ・「米語会話」「米文化理解」「レクリエーションスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

◎移行期（H15年度）教育課程について

○高等学校部分

- ・「米語会話」「レクリエーションスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

◎移行期（H16年度）教育課程について

○高等学校部分

- ・「米語会話」「レクリエーションスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

◎完全実施期（H17年度）教育課程について

○高等学校部分

- ・「米語会話」「米文化理解」「レクリエーションスポーツ」「ウィンド&マリンスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略